

インフィニット・ジェ  
イデッカー

すし好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

かつてバラ色の未来と言われた21世紀。

しかし、科学の発展は人類に明るい未来だけを与えるはしなかつた。

最新の科学技術はロボットを使用した凶悪犯罪やバイオ怪物の出現といった  
ハイテク事件を生み、またこれまで考えられなかつた災害も引き起こした。  
そして、ある一人の天才科学者が開発したパワード・スーツにより、  
世界は混沌を極める……はずだつた――。

奇跡とも言える運命の出会いが、世界を変えていく！

目

次

第1話	プロローグ	—	—
第2話	5年後の始まり	—	—
第3話	山の中で	—	—
第4話	おさわがせ娘！	前編	—
第5話	おさわがせ娘！	中編	—
第6話	おさわがせ娘！	後編	—
第7話	暴走特急！	前編	—

111 87 63 51 23 8 1



# 第1話 プロローグ

21世紀を間近に控えた2000年、電子工学史上最大の発明がなされた。

人間の脳を工学的に再現したA.I.、『フォルツォイクロン』である。

この発明により、ロボット革命が起こり夢物語であつたロボット技術が現実のものとなつた。

そして、後に勝るとも劣らない発明が発表された。

インフィニット・ストラトス。通称、I.S.

新たなフロンティアである宇宙での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツである。

従来の宇宙服やパワード・スーツを遥かに凌駕する性能を秘めているがある欠点が存在した。

それは、女性しか動かすことができないことがある。

また、I.S.には核であるコアとなる部品があり、数にも限りがあつた。汎用という重大な問題と、開発したのが10代の奇天烈な格好をした女子学生ということもあり、誰も真剣に見ようとしなかつた。

そして、ISが発表されて一か月後、ある事件が起きる。

日本を射程距離内とするミサイルの配備されたすべての軍事基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、2000発以上のミサイルが日本へ向けて発射されたのだ。そのミサイル群を迎撃するために、どこからともなく一機のIS現れ日本を守つたことで、ISの名と力は世界に知られることとなつたが、同時にある存在がIS以上に世界中に響き渡つた。

「全く、束のぬめ……。

いくら、自分が心血注いで作り上げたISが理解されなかつたとはいえ、こんな馬鹿げたことを……！」

顔の半分をバイザーで覆い、全身を白い装甲……ISを身に纏う少女は大剣を握りしめながら悔しさで唇を噛み締めていた。

普通の方法や兵器では迎撃しきれない量のミサイルを、ISを使って迎撃することで、

その力を知らしめるという親友の愚考を止められなかつたことと、分かつていながらこの自作自演に乗るしかない自分の無力さに。

「何であれ、絶対に全て叩き斬る！」

一夏が待っているんだからな……！」

I S “白騎士”を纏う少女、織斑千冬は目の前に迫りくるミサイルを迎撃つべく剣を強く握りしめながら、自分の帰りを待つている弟の元へ必ず帰ることを改めて決意する。

「行くぞ……」

ミサイルを迎撃しようとした千冬だったが、I Sのハイパー・センサーが背後から近づいてくる物体を感知する。

「なっ！全長20m近くの大きさで、時速3750km/hだと!?

一体何だ！」

千冬が振り向くとパトカーを連想させる白と黒の装甲で、

頭部にパトライトをつけた巨大なロボットが、こちらに向かってきていた。

「あ、あれは……」

ロボット技術が盛んな現代でも、ビルにも負けない大きさのロボットは珍しいが、

それ以上に飛んでくるロボットは、千冬の知るものと違いどこか人間のような息吹を感じさせた。

『まもなく、ミサイルの迎撃予定ポイントに到着するぞ、勇太、一夏！』

『よし！ ジエイデツカー！ ミサイルを撃ち落として、日本を守るんだ！』

「がんばれっ！ ジエイデッカー！」  
『了解！』

この巨大ロボットこそ、多様化、ハイテク化していく犯罪から人々の安全を守るために警視庁が設立した新しい警察組織——“ブレイブポリス”所属のロボット刑事“デッカード”が、サポートメカ“ジエイローダー”と合体したジエイデッカーである——。

だが、ロボットであるはずのジエイデッカーが、まるで人間のように通信に返事をしているのは何故か。

それは、彼がある二人の少年との出会いにより、『心』を持ったロボットだからだ。当初、『心』を持つたことであらゆる性能が設定された数値を上回つたデッカードだったが、

その代償か合体データを呼び出すことができなくなつてしまつていた。

しかも、間の悪いことに自称“闇の魔人”キャトー・ノリヤスによる東京襲撃が行われようとした。

絶体絶命の中、デッカードは二人の少年と戦闘の中で力を合わせて、初めての合体を見事に成功させたのだ。

形勢を逆転し、キャトー・ノリヤスを逮捕した彼らブレイブポリスだったが、

警視庁に帰還した直後に息をつく暇もなく、緊急出動の命が下つた。

ハツキングと大量の小型ロボットの侵入により、ミサイル発射の危機が知らされたのだ。

犯人はご丁寧にも、この情報をカウントダウンと共にリーケし、日本は大パニックとなつた。

“ジェイバスター！”

「何だよ、こいつ……」

ジェイデッカーがミサイルを打ち落としていく姿を、白騎士を通じて見てているのはインフィニット・ストラatosの生みの親である篠ノ之東であつた。

束は、映し出される映像をかじりつくように見つめる。

専用武器と思われるライフルと脚部に収納されたビーム砲で、的確にミサイルを迎撃していき、巨体に似合わぬ華麗なアクロバット飛行。

どれもこれも現存のロボットを大きく上回り、

下手したら自分の自慢のISより上かもしれない性能だ。

当初、束はハツキングで知ったブレイブポリス……デッカードを

それほど気に留めてはいなかつた。

最新のAIで人語を完全に理解するのは、少々関心したがそれだけだつた。

何故なら自分が作ったISには、操縦者と意思疎通するには時間と絆を育む必要があるが

既存のロボットとは違ひ完全な意思が宿つており、

無限の進化の可能性を秘めているからだ。

だが、ISを世に知らしめるため今回の事件や白騎士の最終調整にかかりつきりだつた

束は見落としていた。

デツカードが、二人の少年……友永勇太と親友である織斑千冬の弟一夏によつてISと同じく『心』を持ち無限の可能性が宿つたことを——。やがて、ジエイデツカーの出現に驚いていた千冬もミサイル迎撃に加わり、ミサイルは全て打ち落とされた。

歴史に“白騎士事件”と記されるこの事件は、現行兵器を遥かに凌駕する二つの存在を世界に知らしめた。

一つは、纏うことで空想の中のヒーローの如く人に翼を与える鎧、インフィニット・ストラトス。

もう一つは、『心』を持ったロボット刑事チーム“ブレイブポリス”である。

——ホールド・アップ！ブレイブポリスだ！

## 第2話 5年後の始まり

「ふふ♪」

「わあ～……」

空き地で、二人の少年が空を飛ぶラジコン飛行機を眺めていた。リモコンを持って操縦している、小学三年生ぐらいの少年の傍で、幼稚園児と思われる小さな子供が目を輝かせていた。

「ねえ～ねえ～。ぼくにもぼくにも～！」

「いいよ♪それじやあ、一緒に……」

ピヨンピヨンとジャンプして操縦をせがむ子に、しようがないなあ～といつた感じで少年が、リモコンを貸そうとしたらラジコン飛行機はコントロールを失い林の中に姿を消してしまった。

「おちちやつた……」

「あちや～」

落ちてしまつたラジコン飛行機を探すために、二人は林へと入つていく。  
「どこにいったのかな～？」

「うん……あつた！」

ラジコン飛行機を見つけた二人は、早く拾おうとするあまり足元に目が行かなかつた。

「うわっ……！」

「ひやっ！」

「わああああああああ!!!!」

二人は、まるで落とし穴のように隠れていたダクトに落ちてしまつた。

「うつ！」

「たつ！」

落ちたダクトの先には、幸いなことにダンボールがありそれがクッショングとなつて二人にケガはなかつた。

だが、落ちた拍子に吹き飛んだダンボールが何かの機械のスイッチに当たり、そこで作られているものが起動した。

「いてて……何だこ……」

「……おもしろーい！もういつかい♪もういつかい♪」

「香氣だな。……ん？」

「わっ!? ロボット!？」

「ほんとだ。おつきいつ！」

『わたしは、でつかーど……わた、しは……でつかーど』

二人が見上げる先には、まだ作りかけなのか人型の基礎フレームに顔だけのロボットが置かれており、自分の名前らしきものを繰り返し口にした。

「はあ……僕は勇太……友永勇太だ！」

「織斑一夏だよ！」

『ともなが、ゆ、う、た……。

おり、むら、い、ち、か……』

友永勇太、織斑一夏。

地球で初めて心を持ったロボット“デツカード”的人工知能に

最初に記憶された言葉……それが二人の友達の名前であつた――。

「ううううん……なんか、懐かしい夢見ちゃつたなう。

さてと！」

ベッドから起き上がった10歳ぐらいの少年は、階段を下りて玄関へと向かつた。

『おはよう、一夏。今日も早いな』

「おはよう、デツカード。

家は、揃いもそろつて朝に弱いのが多いからな」。

俺が起こさないと、いつまでも寝てるんじゃない?』

『いつも、ご苦労様だな』

玄関に出て、新聞を取つた少年……一夏は駐車場に止まつて いる  
パトカーと世間話をする。

もちろんこのパトカーは、ただのパトカーではなくデツカードが変形したものである。

普段、彼はここ“友永家”的一員として生活しているのだ。

「今日は、懐かしい夢を見たよ。

俺と勇兄が、最初にデツカードに会つた時のさく

『あの時か……。

君達と出会つてから、5年ぐらいになるな。

小さかつた一夏も勇太のように大きくなるわけだ

「じゃあ、みんなを起こしてくるよ」

『……一夏もブレイブポリスのボスとなつた時の勇太と同い年か。

時が経つのは、早いな』

ウインカーを器用に動かしてパトカーのまま感情を表すデッカードは、感慨深げにつぶやくのだつた。

「はい！みんな起きて！」

朝ごはんだよ～」

「ふ……わあ～～～」

「勇兄、朝ごはんの前に顔を洗つてきたら？」

「う～～～ん……おはよう、一夏」

「おはよう、くるみ姉。

受験生は、夜遅くまで勉強で大変だね」

「おはよう。いつも悪いわね、一夏」

「気にないでよ、あずき姉。

好きでやつてるんだから。

それにしても、千冬姉は今日も最後か。

本当に、朝は弱いんだから～」

“いつまた、外宇宙から侵略者が来るかわかりません！”

日本の……ひいては、世界を守るためにISによる軍備強化を…”

“ですから！これ以上、ISを軍事に取り込むのは危険です！”

“そうだ！”

個人の気まぐれで、牙を向く危険があるものなど使えるか！

『フォルツォイクロンの悪夢』を忘れたのか！”

「まゝた、やつてるわね」

「全く……。束さんもISは、宇宙に行くために作つたつて言つてるのに……。

それに防衛つて言うなら、ブレイブ・ポリスがいるじやん！」

朝食を準備しながら、一階へと降りてくる家族にそれぞれ声をかけながら、一夏はまだ起きそうにない千冬を起こしに行こうとするとテレビのニュースに目を向ける。

聞こえてくる内容に、呆れた声を出すくるみに一夏も同意する。

白騎士事件直後――。

現行兵器を遙かに上回る性能を世界に見せつけたISとブレイブ・ポリスは、瞬く間にその名が広まつた。

当初、本来の目的より外れて軍事転用されようとしたが、それはすぐさま収束した。

I Sは、心臓部であるコアが開発者である束でも把握しきれていない  
プラットボックスと化しており、またブレイブポリスの心が宿りA Iから超A Iとなつた人工知能も人間の脳のように未知のものとなり、

どちらも一朝一夕で解析できる代物ではなかつたからだ。

軍事転用をするためには、想像以上に長い時間を必要とするため、  
ブレイブポリスは試験運用もかねて警察組織として、

I Sは宇宙開発だけでなく災害救助等のパワードスーツとしての研究開発が  
進められ、兵器としての利用は見送られるかと思われた。  
だが、犯罪史に残る最悪の事件で状況は一変してしまう。

“フォルツオイクリンの悪夢”。

フォルツオイクリンを開発したエヴァ・フォルツオイクとその息子  
ノイバー・フォルツオイクによつて引き起こされたこの事件は、  
“白騎士事件”以上に人々の記憶に深く刻まれている。

エヴァ・フォルツオイクは自らが作り上げたフォルツオイクリン  
によつて来るであろう、ロボット時代を支配するべく密かに  
フォルツオイクリンに特殊な回路……シークレットサーキットを組み込んでいた。  
“ハーメルンシステム”によつてシークレットサーキットが起動したフォルツオイ

## クロン

を搭載したロボットは支配下におかれ、エヴァの思い通りになつてしまふのだ。それは、心を持つたロボットであるブレイブポリスも例外ではなく、危うく最悪の犯罪ロボットになつて、人々に牙を向けてしまうところであつた。同じように世界各国の軍事兵器の大半は、フォルツオイクロンを搭載したロボットであり、

その全てを無力化され、フォルツオイク親子を止められるものはいなかつた。しかし、世界の終わりとも言える中でフォルツオイクロンを搭載していなかつたISが、盾となり剣となつてフォルツオイク親子と戦つた。

兵器として開発、研究がほとんどされていなかつたISだつたが、突貫作業で少ないながらも武器を搭載し、フォルツオイク親子の配下ロボット達を迎撃した。初めてと言つていい実践に、人間を簡単に握りつぶせるぐらいの巨大な相手、10機にも満たない数にも関わらず、ISは善戦した。

体格差を利用して、機動力でかく乱し、一体一体を確実に倒していくが、疲れを知らないロボットに圧倒的な数の差、一つのミスが死に直結するという極限のプレッシャーに次第に押されていった。だが、その行動は無駄ではなかつた。

I Sが防衛に出てくれたおかげで、ブレイブポリスはハーメルンシステムに  
対抗する改造をジエイデツカーに施すことができ、その戦いの中で  
デツカード達、超A Iを持ったロボットは機械の体に心を持つた  
機械生命体へと進化を果たし、フォルツオイク親子の野望を止めることができた。  
“そちらこそ、忘れたのか！”  
超A Iを搭載した軍事ロボットの脅威を！  
もし、彼らが人間に反旗を翻した時に、対抗できるのはI Sしか  
ないのだぞ！”  
搭載すれば、ロボットに設定された以上の性能を引き出す超A Iだったが、  
それは一步間違えば、心を持った悪魔を造り出してしまう危険もあつた。  
実際、初めて超A Iを搭載した軍用ロボットであるチーフテンシリーズは、  
人間には制御できず、何人もの犠牲者を出し、ブレイブポリスも圧倒する程であつた。  
これらの事例も踏まえ、各国は制御できない危険性のあるロボットに代わる兵器とし  
て  
ISに注目するようになつたのだ。  
数に限りがあるというのも逆に、厳重に管理すれば均衡を保てるということであつ  
た。

無論、ISにもフォルツオイクリンのように開発者である  
束の気まぐれによつて暴走等の可能性があるため、

兵器への運用はそれほど大きくは進んでいないのが現状である。

中には、これを機に兵器を破棄してはという意見もあるのだが、数えるほどしか  
ない意見など無いも同然であつた。

「はあ～。兵器だのなんだのって、このままじゃハイジヤス人の言うように  
本当に地球は滅びちゃうよ……」

「勇兄……」

ハイジヤス人とは、銀河警察として宇宙の監視者を名乗る宇宙人達である。  
かつて、地球へ侵入した宇宙の犯罪者を追つてきたのをきっかけに、  
ブレイブポリスとコンタクトを交わし、同じ平和を守る者同士、共に  
歩んでいけるかと思われたが、平和への考えは異なつていた。

ハイジヤス人達は、種としての生命をまつどうさせるために人々の心に干渉し  
感情を消し去る“精神浄化”を地球に対して行おうとしたのだ。

このまま行けば、地球の文明は人間の悪しき心によつて滅びてしまうという  
判断の下に。

実際に精神浄化を受けてしまつた人がどうなつてしまふかを、運よく免れた

宇宙人力ピアから伝えられた勇太達ブレイブポリスは、精神浄化を阻止するべくハイジヤス人達に、自分達の意志を伝えた。

地球を滅ぼしてしまったかもしれない、犯罪と言う人の悪とは自分達が戦っていくと——。

それを聞き届けたハイジヤス人達は、受け入れたのか見限つたのか、宇宙のいざこかへと去つていった。

「なうに、落ち込んでんのよ勇々太々！」

「いたつ！く、くるみ姉ちゃん……」

「ブレイブポリスのボスが、そんなんはどうするの！」

「そうよ、勇太」

「うん！今日からは、俺も皆と一緒に戦えるんだからさ！」

「あずき姉ちゃん……。一夏……。

「そうだね……。悩んでも、何も解決しないよね！」

家族の励ましを受けて、落ち込んでいた勇太の表情は明るさを取り戻した。

「おはよう……みんな……。」

「ん？どうかしたのか？」

「千冬姉……」

いい感じでまとまつたと思つたタイミングで、家族にしか見せないだらしない姿で現れた千冬に一夏は脱力するのであつた。

「待つていたよ、一夏君」

「こんにちは、冴島さん！」

時間は流れ、小学校の授業が終わる放課後。

一夏はブレイブポリスの基地、デツカールームへと来ていた。  
そこには、デツカードや他のブレイブポリスのメンバーに、ボスの勇太、  
警視総監の冴島十三が一夏を歓迎していた。

「では、改めて……織斑一夏君。

本日をもつて、君を正式にブレイブポリスの一員に任命する！」

「はい！精一杯、がんばります！」

……ふつ……ハハハハハ！」

任命を受け、デツカード達とお揃いの警察手帳をもらつた一夏は、  
背筋を伸ばして敬礼をし……耐えきれなくなつたように笑い出す。

『ハハハ！ そうだよね。何だか、今更つて感じだよね？』

『そうだな、ドリルボーイ。

最初から一夏は、ブレイブポリスの一員みたいなもんだしな?』

一夏につられて、ビルドチームのドリルボーイとパワージョーは笑い声をあげる。

「うむ。

確かに勇太君のように一夏君も刑事にしたかつたが、流石に5歳の子供を

任命するのは無理があつたからな』

『最も、それも形だけのようなものでしたがね』

『そうです。昔から、一夏も我々の大切な仲間であります!』

実に残念と言つた感じで冴島が、一夏を刑事にできなかつた理由を言うが、マクレーンとダンプソンはそれこそ今更と言うように続く。

勇太程ではないが、一夏も度々ブレイブポリスの一員として事件解決の力になつていたのだ。

『やれやれ。

おチビさんもちよつとは、大きくなつたと思つたのに今度は、別のおチビさんかよ!』

『そう言いなさんな。

これでこそ、ブレイブポリスつて感じじやないですか』

ガンマックスが憎まれ口を叩くが、本気で言っているのではないのは誰の目にも明らかであり、シャドウ丸がたしなめつつ、プレイブロリスらしさが戻ってきたと微笑む。

『それで、総監？』

『一夏はどういう役割に就くんですか？』

「ああ、それなんだが、藤堂の下について君達のメカニックを担当してもらおうと思う」

和やかな雰囲気の中、デューケが一夏の任について尋ねると冴島は、思い出したように説明した。

「へえ～。てつきり、僕達と一緒に現場に出ると思ったのに」

「へへへ♪

機械いじりは、昔から好きだつたしね。

それに、現場にも出るよ？

皆が、ケガをしてもすぐに治せるようにさ！」

『一夏……』

一夏が任されたことに意外だったのか、勇太が覗き込みながら傾げると一夏は照れくさそうに笑うのであった。

そんな一夏の優しさにデツカードは感慨深くなるが、それは他の皆も一緒であつた。

「ははは！頼もしいな♪♪

じやあ、よろしく頼むよ一夏】

「任せてよ、勇兄！」

「違うだろ、一夏。ここじや、僕のことは……」

「あっ！そつか！こほん……。

任せてよ、ボス！」

『ああ、よろしく頼むぞ一夏』

「オッケイ！」

ブレイブポリスの始まりの時のように、一夏は勇太とデツカードにピースサインで応えるのであつた。

### 第3話 山の中で

「それで、どうだ藤堂。一夏君は？」

「大したものでさ。

昔から、筋はいいと思つていやしたが、教えたことは砂が水を吸うみたいに吸收していきやす。

あまり好きな言い方じやありやせんが、血は争えないってやつですね」

「織斑冬輝（ふゆき）博士か……」

冴島は藤堂と共に自宅で昼食を取りながら、最近の一夏の様子を尋ねる。  
藤堂は笑いながら彼の成長を語り、その背にある男の姿を感じ取っていた。  
一夏と千冬の父、織斑冬輝。

ロボット工学の第一人者であり、従来の技術にとらわれない自由な発想の数々で、ロボット技術を発展させた天才科学者である。

彼がいなければ、ロボット技術は半世紀の遅れがあつたと言われている。  
「俺は、あの人の発明は好きでしたね」

なんて言うか、こう……夢があふれているっていうか！」

「私もだ。

特に彼らは、人間の“友達”としてのロボットの研究に力を入れていた。それが、デッカード達ブレイブ・ポリスの基礎理論にもなっている……。その息子の一夏君が勇太君と共に、デッカードと出会ったのはまさしく運命だと思うよ」

「研究発表先の海外で事故にあつて、亡くなつたと聞いた時は、誰もが悲しみましたさあ……。

ロボット技術者で、織斑博士と関わらなかつた奴はいませんからね」「一緒に行つていた奥さんも共に亡くなつたらしく、一夏君と千冬ちゃんは親交のあつた勇太君のご両親に引き取られたらしい……」

目を輝かせて懐かしむ昔話から一転して、二人の間に重い空気が流れる。「ところで、旦那?

わざわざ一夏君のことを聞くために、俺を呼んだですかい?」

「いや、お前を呼んだのはその織斑博士のことについてだ。

これは、まだ可能性の域を出ない話なのだが、どうも織斑博士が亡くなつたのは事故ではないかもしないんだ……」

「な、何ですって?!」

「下手なことを言つたら、一夏君と千冬ちゃんを混乱させてしまうからな。まず、お前だけには話をしてもおこうと思つて呼んだんだ。

もしも、事故でなかつたとしたら、我々ブレイブポリスは強大な組織と戦うことになる」

「強大な……組織？」

「ああ。お前も、聞いたことがあるはずだ。

第二次世界大戦の頃から、存在していると言われる……世界の裏で暗躍する謎の組織……」

「まさか！」

「そう。亡国企業……通称、ファンタム・タスクだ」

．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．

「おーい！お前らう。早く来いよ！」

「待てよ、虎太郎！」

「流石、忍者の息子だね」

「どこでも元気だよな、虎太郎は」

一夏は今日、山に遠足にやつてきていた。

同じ班である霧隱虎太郎は、水を得た魚の如く元気いっぱいに駆け回り、クラス委員である野球のユニフォーム風の服を着ている少年、流崎力也は彼をなだめるのに四苦八苦している。

「もう、虎太郎君！ 集団行動を守りなさい！」

「亜衣子先生もいつも以上に、大変そうだね」

「そうだな、鷹介」

「虎太郎君！ ちゃんと先生の言うことを聞きなさいー！」

「うーん、何かイマイチピンと来るもののが無いわね……」

「千夏ちゃん、カメラを回しながら歩くと危ないよ？」

「テンション上がっている奴もいれば、平常運転の奴らもいるな

「ははは……」

自由気ままな虎太郎を注意する担任の立花亜衣子と女子のクラス委員である武田桂に、

学校新聞の記者でいつもスクープを狙っている結城千夏、そんな彼女に注意をうながす小牧百合香。

遠足でも普段の学校とやっていることが変わらない面々に、一夏はクラスメートの風祭鷹介と共に肩をすくませてヤレヤレといった感じである。

「そんでもって、あいつは……はあ～。

ほら、お前もこっち来いよ～、篠～」

「う、うるさい！余計なお世話だ！」

「……つたく」

クラスメート達から少し離れて歩く少女、篠ノ之篠に一夏は声をかけるも返つてくるのは如何にも不機嫌といった尖つたものだつた。  
最もそれは、ただの照れ隠しであることは、一夏を除くクラスメートや担任にはバレバレであつた。

「一夏も変わらないよね～」

「何だよ、一体？」

「（全く、どうしてお前はそうニブイのだ！）」

鷹介の呆れ顔に首を傾げる一夏を、篠は後ろからムムムと唸りながら鋭い視線を送る。

「（ただでさえ、ブレイブポリスに入つて一緒にいられる時間が少なくなつてきたと言うのに！）」

心中で地団駄を踏みながら、篠は今の自分と一夏の関係に不満を漏らす。もう、お分かりだろうが、彼女は一夏に淡い思いを抱いているのだ。

「(はあう。一夏と会った時は、こんな風になるなんて夢にも思わなかつたぞ……)」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
一夏と筈の出会いは、二人の姉を通してのものであつた。

筈は、一夏の姉である千冬の親友にして I.S の生みの親である束の妹であり、千冬が筈と束の実家である剣術道場に一夏を連れてきたことで知り合つたのだ。知り合つた頃は、馬が合わなかつたのがたびたび衝突していたが、何より筈が一番気に食わなかつたのは、自分以上にあつた剣の才能だつた。

幼い頃から、剣道を学び同年代の男子にも負けない腕前であつたが、一夏はそんな筈より短い期間でほとんど変わらない腕前となつたのだ。

もちろん、剣道を始めた当初は一夏の黒星続きだつたが、勇太やデツカード達ブレイブポリスと共に大きく心が成長している一夏はメキメキとその腕を上げていつたのだ。

「(最初は負けん気だけは一人前で、腕の差もわからないのか何度負かされても向かつてきて……そして、あつという間に追い付かれた……)」

しかも、ブレイブポリスも手伝つていて、鍛錬は私よりも少なかつたはずなのに(」  
剣は己を映す鏡と言うように、一夏が短期間で腕を上げたのは

それこそブレイブポリスで過ごした時間が大きかつた。

向かうところ敵なしで、無敵と信じて疑わなかつたジエイデツカーの敗北。人の果てしない欲望と業の深さによる、クローン技術やバイオ生命体等の決して人間が踏み込んではいけない領域を犯した犯罪の数々。そして、ハイジヤス人による精神浄化……。

子供が、経験するとは思えない悲しみや苦難を乗り越えてきた一夏は、本当の意味で強くなつていったのだ。

もちろん、それは一夏だけでなく勇太やデツカード達も同じである。彼らと言う共に歩む仲間、追いかける目標があつたからこそ、一夏はまつすぐに成長できたのだ。

「（一夏に完璧に負けたと思ったのは、あの時だな……）」

筈が思い出すのは、2年生だった時……。

いつものように男子に、からかわれていた時だつた。

古今東西、男子と言うのはからかつた相手の反応を楽しむ……

相手の気持ちなど考慮せず。

竹刀を持ち歩き、しゃべり方もどこか侍を感じさせていた筈は、良くも悪くも目立ち、そういう男子から格好的となつていた。

そこへ口を挟んだのが、一人教室のそうじをする一夏だつた。

別に筹を助けようとしたわけではないが、他のそうじ当番はさぼり一人でそうじをしていたところに加え、無意味に感じるからかいに少々苛立つっていたのだろう。

当然、からかう男子は面白くなく一夏にもやじを飛ばすが、一夏はどこ吹く風であつた。

しかし、不用意に放つた男子の一言で事態は一変する。

“まじめにそうじなんかして、バカみてえー”

“だよなー。この間、交通安全教室で来たダンプソンつて口ボツトも、そこの男女みたいにバカみてえにクソ真面目で笑つちまうよなー”

“リボンしてた男女みたいに笑えたよなー”

そうやってバカ丸出しで笑う三人の男子は、力づくで黙らせられた。  
顔面へ、怒り心頭の一夏の拳を叩き込まれて。

“真面目に、やることの何がおかしいんだ！”

確かに、ダンプソンも篠ノ之も石頭の堅物だよ。

だけどな、お前らと違つて相手を思いやれる優しい奴らなんだよ！”

そこからは、一夏の独壇場であつた。

千冬から体術も教わっていた一夏にとって、自分より弱い相手しかできない者など

何の脅威にもならず、結果3対1でも圧勝した。

だが、そこからは少し大変であつた。

一夏にのされた三人の親が、やれ慰謝料だの裁判などと騒いだのだ。  
別段間違つたことをしたと思わない一夏は気にすることはなかつたが、  
それでも友永家の両親や千冬が頭を下げるのは許せなかつた。

“後で面倒になるとか、考えなかつたのか？馬鹿なのか？”

“馬鹿じやねえよ、馬鹿。”

後の面倒とか知るかよ、仲間の悪口言われて黙つていられるか。

何にも知らないのに、好き勝手なこと言うのは卑怯者のすることだ。

ダンプソンは、口うるさく言うのは相手のことを考えて出し、

篠ノ之だつて倒れた相手が立つのに手を貸せれる女の子だろ？”

少し落ち着いてきたころ、篠は一夏にどうしてこんなことをしたのかと  
問いかける。

実際、この時一夏は千冬とダンプソンからこつぴどく叱られた。

腹が立つたから、力で相手を黙らせるのは“暴力”だと――。

最も二人は、一夏が殴りかかつた“理由”までは、咎めなかつた。

“感情に任せて力を振るうな、馬鹿者。”

怒りのままに振るう力は、ただの暴力だ。

デツカード達は、そんな風に力を使っているか？

だが、そうやつて間違っていることを間違っていると言えたのは……  
よくやつた”

“仲間の悪口を言われて、頭に血が上るのはわかるであります。

自分だつて、カチンときます。ですが、一夏。

力づくで相手をねじ伏せるのは、相手のことを考えない

その子達と同じであります。

本当に、今回自分は間違っていないと胸を張つて言えるでありますか？  
だけど、自分の為に怒つてくれたのはうれしいです”

この千冬とダンプソンからの言葉を受けて、一夏は

力についてよく考えるようになり、“穩便”な方法でバカを撃退していく。

この時、筈は一夏の強さを少しおかつた。

彼の誰かのために怒れる優しさに――。

こうやつて、一夏の優しさに触れた筈は、一夏のことを意識するようになつていつた。

・・・・・・・・・・・・・・

「おっ、そうだ！ なあ、一夏！」

「ちょっと、プレイブポリスを呼んでくれよ～」

「はあ～？ 何言っているんだよ、虎太郎？」

「せつかく遠足で、遠出したんだからさ～。

ちょっと変わった思い出を作りたいじやん？」

一緒に遊ぼうぜ～！」

「虎太郎にしては、いいアイディアじゃない！」

ねえ、一夏君！」

プレイブポリスを呼んで、写真撮らせてよ～！」

「あのな～～～。事件が起きたわけでもないのに、

デツカード達を呼べるわけないだろ」

好き勝手に言う虎太郎と千夏に、一夏はため息をこぼして呆れる。

「何、馬鹿なことを言ってるんだ、虎太郎！」

「そうよ！ プレイブポリスは、正義の味方なのよ！」

そんなつまらないことで、呼んでいいわけないでしょ～！」

学級委員である、力也と桂は当然の如く注意するが、聞き分けがいい方でない

虎太郎と千夏はふくれつ面をさらす。

「馬鹿とは何だ！馬鹿とは！」

「つまんないことって何よ！スクープの邪魔しないで！」

「ちょっと、落ち着きなよ」

「仲よくしよ？」

「遠足でまで、喧嘩するなよ」

「何をやつているんだ……」

売り言葉に買い言葉に取つ組み合つてにらみ合う4人を

鷹介と百合香が止めに入り、一夏と篝は頭に手をやりながら呆れる。

「その辺に」

「ねえ～つてば……きやつ！」

「百合香ちゃん！」

「イタタ……あつ！私のハンカチ！」

組み合つている内に、突き飛ばされた百合香はその拍子にハンカチを落としてしまい、崖に落ちるのを防ぐ柵を超えた先にある木の枝に風で飛ばされ、引っ掛かる。

「あちゃ～」

「もう！虎太郎君！千夏ちゃん！」

「ううん……柵に手を付けても取るのはちよつと難しいな……」「みんな、危ないから近寄らないで～！」

「亜衣子先生、私のハンカチ……」

鷹介が発端の虎太郎と千夏をにらむと二人は怯み、それを無視しながら力也が取るのは無理ともらすと百合香は、涙目になる。

「……わーったよ！俺が取つてきてやるよ！」

「こ、虎太郎君！」

「おい、やめとけって！身軽なお前でも危ないぞ」

「そうよ、やめなさい虎太郎君！」

「じゃあ、どーすんだよ！」

「…………」

自分で蒔いた種だからと、責任を取つてハンカチを取りに行こうとする

虎太郎を力也達が止めようとする中、篝はじつとハンカチに目をやる。

「え～っと、確か……あつた！」

「お～い、虎太郎～。これを使えば、取れるんじやないか？」

「一夏君、それってロープ？」

「何で、そんなものを持ってきてるんだよ？」

「山はいつどこで、何が起きるかわからないからな。

役に立ちそうな道具は、持ってきているんだ。

虎太郎なら、このロープを命綱にして結べば大丈夫だろ」

「すっげえなあ、一夏♪

よし！後は、俺に任せて……」

「何してるの篠ノ之さん！」

「危ないわよ！戻つて！」

一夏が22世紀からやつてきたネコ型ロボットよろしく、リュックから秘密道具もといロープを取り出して、虎太郎達に

説明していると、桂と千夏が悲鳴を上げる。

見ると、篠が柵に手をかけ崖から生えた樹を足場にして、ハンカチへと手を伸ばしていた。

「篠っ！」

「後少しへ……」

「篠ノ之さん！」

「……っ！やつた！とれ……」

ほんの数センチ伸ばせば届く距離まで手を伸ばした篠だったが、

迫る危険の足音に気が付いた百合香の声は届かず、ハンカチを手にした瞬間体が浮遊する感覚に襲われた。

えつ

一  
第

何が起きたか理解できないといった顔をする筈が見たのは、自分へと手を伸ばす一夏の姿だつた。

「うつ…………何が…………」

「大丈夫か……等……？」

「え？ い、一夏！？」

意識が少し飛んだ筈は、自分の下から聞こえてきた一夏の声に

驚きひつくり返つた声を上げる。

「どうしてお前が私の下に！」

—それより、どうしてもらつていいか?』

す すおん / / / / / / !】

……テテテ。

ずいぶん、落ちたなあ。途中の樹がクツショーンになつていなかつたら、

「こんなかすり傷じやすまなかつたな」

「落ち……た？」

急いで一夏の上からどいた箒は、顔を見上げて上を見る一夏と同じように上を見て、自分達の現状を理解した。

足場としていた樹が折れて、自分は転落したのだ。

そして、そんな自分を助けようとして一夏も一緒に落ちてしまつたのだ。  
一夏の言うように、何度も途中の樹に引っかからなければ、落下のスピードは落ちず、大怪我を負うか最悪命はなかつただろう。

「……」

「さてと。これは、非常事態だからな。

デツカード達に救援を……つてあれ？

ない……警察手帳がない！

まさか、落ちている時にポケットからこぼれちまつたのか!?」

一夏はデツカード達に連絡するべく、ブレイブポリスの警察手帳を取り出そうとする

が、

ポケットに入れていたはずの手帳が無いことに焦りを見せる。

一夏の言うように、彼の警察手帳は落下中に落としてしまい森の中であつた。

「くっそ。これじやあ、先生達が救助を頼んでもみんな、山に落ちた手帳の方に行つちまうぞ。

こうなつたら、自分達で何とかするしかないな……。

とりあえず、登山道か川を探そう。どつちでも辿つていけば、山を下りられるはずだ。

行くぜ、篝』

「えつ？ あつ……ああ」

かなりの距離を落ちたのか、上を見ても落ちた柵は見えず、助けを呼ぶこともできないので、一夏は自分達で行動を起<sub>こ</sub>そうとする。

「つ！（痛つ！まさか……落ちた時に足を捻つたのか……？）

「ん？ どうしたんだ？」

「な、何でもない！私はここで待つてるから、早く助けを呼んでくれ」

「ここで待つてるつて……どこかケガして動けないのか？」

「だ、大丈夫だ！ただ、捻つただけ……あつ！」

「こんなことで、意地を張つても仕方ないだろう。」

ほら、靴脱いで。

確か、包帯とアイスパックがあつた！」

立ち上がるがろうとした筈は、足に走る激痛に顔を青くし、怪訝に思つた一夏に余計な気遣いをさせぬよう、何でもないとウソをつくがあつさりと看破され応急手当を受ける。

「よし、できた。ほら、筈[ハシ]」

「何だその恰好は？」

「何つて、おんぶだよ。そんな足じや、歩けないだろ?」

なつ！おおおんぶだと

そそそそんなどてきゆりゆか！

他に一人一緒に動けるいい方法も無いため

筆を一人置いておくわけにはいかないし、山の天気は変わりやすいから、雨なんかで降られたらそれこそ最悪だ。

そうなる前に、早くみんなと合流するか山小屋でも見つけないと……

「さう。  
わ、わかつた。

好きな男子におんぶしてもらえるという思わぬ展開に、頭が沸騰する  
筈だったが、一夏は全く気にすることなく早くおぶさるように促す。  
もう一度言うが、テンパつて噛みまくりの筈に、全く気にすることなく。

「どうしよう、虎太郎君！ 力也君！」

「一夏君と篠ノ之さんが！」

「くっそー！ こうなりや、俺が一夏のロープを使って  
下りてみるぜ！」

「やめろ、虎太郎！」

「そうよ！ 虎太郎君まで、迷子になつて遭難してしまわ！」

「とにかく、早く救助を呼びましょう！  
先生！」

「ええ。桂さんの言うとおりね。

ブレイブポリスに……あああつ！

携帯の充電が切れてるつ！？」

「「「「えええつ！？」」」

一方、その頃。

残された虎太郎達は、大混乱になりながらも何とか一夏と箒を助けに行こうとするが、

いい手は思い浮かばず、救助の連絡をしようにも連絡手段もない一同は、山を下りるしか

手は残されていなかつた……。

「はあ……はあ……ど、どうだ箒？」

方角は……こっちで……あ、合つてゐるか？」

「ああ。大丈夫だ……このまま、まつすぐだ。

（一夏……すごい汗だ……）

行動を開始した一夏と箒は、持つていた地図とコンパスそして太陽の位置を頼りに登山路を目指していた。

一夏に背負われた箒は、地図を手にナビをするが汗だくの一夏に申し訳なさでいっぱいだつた。

「箒……足は、大丈夫か？」

痛みがひどくなつたら、すぐに言えよ？」

「私より、お前の方が大丈夫か？」

さつきから、歩き続きで疲れているだろ……」

「俺は……その……あれだ！男だからな！」

「何だそれは……？」

筹を不安にさせないためか、ずっと話しかける一夏だったが、多少どころかかなり強がっているのは明らかだつた。

「ところで……さ。

何であんな無茶して、百合香のハンカチを取ろうとしたんだよ？」

「そ、それは……前にあのハンカチは、母に作つてもらつたものだと  
言つてたから、早く拾いたいだろうと……」

「相変わらず不器用に優しいよな、お前。

だけど、それでお前がケガとかしたら意味ないだろ……」

「すまない……私のせいでこんな……」

「まあ、終わつたことをグチグチ言つても仕方ない！

日が沈む前に、早く皆と合流しようぜ！」

「……私より、お前の方がずっと優しいじやないか

「ん？何だつて？」

「何でもない……！」

こうやつて二人、山で迷子になつたのは自分のせいだと落ち込む筈に一夏は明るく笑いながら、前向きに考えていく。

そんな一夏を見て、顔を赤らめてか細い声でつぶやく筈の言葉は幸か不幸か一夏の耳には入らなかつた。

「あれ? 何か聞こえなかつたか?」

「いや。何も聞こえないぞ?」

「けど、何か足音のような……」

「ま、まさか……クマとかじやあ!」

「ううん、動物の足音つて言うよりあれは……もっと大きい……」

『おーい!』

「あの声は!」

森の中をさまよい歩くこと数時間。

どこからか、重量感のある足音が聞こえてきて、山の動物かと筈は

一夏に強く抱き着くが、同時に聞こえてきた声に一夏の表情は安心に染まつていく。

『一夏、どこにいるでありますかー!

つ! 一夏!』

『ダンプソン!』

『見つかって、よかつた。どこか、ケガはしてありませんか?』

「俺は、大丈夫。でも、筈が足を捻ったみたいで……」

『わかりました。

まずは、みんなに連絡します。

こちら、ダンプソン。一夏と遭難した子供を、発見したであります。  
これから、ふもとまで連れていきます……では、二人とも』

聞こえてきた足音の主は、ダンプソンであつた。

彼は一夏と筈を見つけると、ホツとし通信で無事を伝えると一人を手に乗せて移動をする。

「つ！」

『大丈夫。しつかり、つかまっているであります』

「どうだ、筈。すげえーだろ♪』

「あつ……ああ

「それにしても、何でダンプソンがここに?』

『連絡を受けたんです。一夏がクラスメートを助けようとして、

崖から落ちたと。

それで、動けるメンバーで駆けつけたのであります』

ロボットの手に乗るという初めての体験に驚く筈に、一夏はそのすごさを胸を張つて自慢する。

その中で、一夏はダンプソンがここにいる理由を尋ねる。  
一夏と筈が落ちた後、急いで山を下りていた虎太郎達はその途中で運よく他の登山客と出会い、何が起きたのかを話してブレイブ・ポリスに連絡をしてもらつていたのだ。

『大変だつたんですよ？』

連絡がつかないと思って、手帳の反応を探したら手帳しかなかつたから、しらみつぶしで探したんですから』

「あはは……すみません」

ダンプソンの愚痴に一夏は、ガクツと頭を落とす。

「ち、違うんだ！私が一人で、先走つたからそれで……！」

『どういうことでありますか？』

落ち込む一夏を庇うように筈は、必死にダンプソンに自分が悪いと伝える。

『なるほど……。

確かに、それはあまり褒められないであります』

「うつ……」

「おい、ダンプソン！」

『一夏。

こういうことは、ごまかさずちゃんと言わないと

ダメであります。

一夏は自分でやろうとせず、他の子達と力を合わせようと  
していました。

最初から、彼らと一緒に落ちたハンカチを拾おうと  
していれば、こんなことにはならなかつたはずです』

「……っ！」

『だから、戻つたらみんなにちゃんと謝るであります。

とても心配して、いたでありますから』

ダンプソンは、凜とした口調でもどこか優し気に篝に語り掛ける。

その言葉から篝は、ダンプソンが自分のことを思つて敢えて厳しく  
言つているのを感じた。

「なんていうかさ。やっぱり、篝とダンプソンって似てゐるよな。」  
眞面目で頑固だけど、お人好しの優しいとか♪』

『誰が、頑固ですか！自分は、やるべきことをやっているだけです』

「はいはい」

箒とダンプソンの意外な組み合せの似た者同士を、褒める一夏  
だつたが、二人は頑としてそれに抗議した。

そういうして いる内に、一夏達はみんなが待つふもとに到着した。

「みんな！あれ！」

「一夏！篠ノ之！」

「心配かけやがつて！」

姿を見せたダンプソンとその手に乗る一夏と筈を見た鷹介が叫ぶのを皮切りに虎太郎、力也が喜びの声を上げて他の子達も同じように安堵の声を上げる。

「よかつた！ 今度の学校新聞のトップは、これで決まりよ！」

「あなたね」

「でも、二人とも無事で本当によかつた……！」

カメラを回す千夏に呆れる桂のそばで、百合香は涙ぐむ。

そんな彼女達の元に、ダンプソンの手から降りた箒が一夏の肩を借りてやつてきた。

〔）、小牧……〔）、これ……」

「私のハンカチ！」

「何とか拾えたからな……」

そ、それとみんなー！

あの……その……一人で勝手なことして……心配をかけて……すまなかつた！」

普段、孤高といった印象の筈が頭を下げて謝る光景にクラス全員  
唖然とする。

「いや、こいつさ。そのハンカチが、百合香の大事なもんだつて知っていたから早くとつてやろうとしたみたいでさ」

一夏つ

「篠ノ之さん……ううん。篠ちゃん、ありがとう！」

「なんだ！」ツンツンしてると思ったら、意外と優しいんだ！』

「あ！えつ！わ、私は……！」

一夏のフォローにより、筈の元にクラスメートが駆け寄り矢継ぎ早に褒めるものだから、筈はタジタジとなる。

『やれやれ、一夏は相変わらずですな』

『ダンプソン!』

『無事に、解決できたみたいですね』

『パワージョー、シャドウ丸』

眼下で騒ぐ子供達を見て、その発端となつた一夏にダンプソンが呆れていると一緒にやつてきたパワージョーとシャドウ丸が合流する。『で?この騒ぎは、何なんだ?』

『一夏がいつもの如く、"たらし"を發揮したのであります』

『またですかい。狙っているんじやなく、素でやつているのが末恐ろしいですね~』

『全くだぜ。一体これから先、何人落ちるのやら』

彼らの間では共通の認識となつてているのか、一夏の天然に肩をすくませながら、彼の将来を想像して苦笑いをもらす。

そんな彼らの想像がおそらく正しいとばかりに、顔を真っ赤にした筈が一夏をポカポカと叩いていた。

# 第4話 おさわがせ娘！ 前編

「い～ち～か～！」

「どわつ!?」

放課後となつた小学校のとある教室で、帰りの支度をしていた一夏は後ろから誰かに抱き着かれて机に突つ伏される。

「いたたた……。何すんだよ、鈴……」

「にししし♪さあ一夏、遊びに行くわよーーー！」

一夏に飛びついた少女は、鳳鈴音。

5年生に進級したと同時に、中国からやつてきた転校生だ。

小柄な体格にツインテールと人懐っこい性格も相まって、好奇心旺盛なネコを連想させる。

「鈴！貴様、何をしている!!!」

「んくくく？コアラごっこ？」

「自分からやつて、何で疑問形なんだよ？」

一夏の背中に飛びつきながら腕を突き上げる鈴に、篝が怒鳴り声を上げる。

箒の気持ちを知つてか知らずか、鈴はわざとらしく首を傾げてかわいらしい声を上げる。

「えへへへ、いいじやん。別に」

「ぐ、ぐるじい。は、ばなぜ……」

一夏から鈴を引き離そうとする筈だつたが、その鈴は一夏の首を絞めてきれいな花畠が広がる川へ送ろうとする。

『おうい、一夏。迎えに来たぜって、何してんだ?』

「ゲホゲホつ。パ、パワージョー……」

昼ドラの修羅場まがいの痴話げんかは、  
窓の外に現れたパワージョーによつて、収まつた。

『あうなるほどな。いつものことか』

「いつものつて何だよ？」

「ページヨー、やつほー♪」

『よう！相変わらずだな、鈴。

『第もちよつとは、素直にならねえとこいつに盗られちまうぞ?』

「ふん」

せき込む一夏を怪訝に思うパワージョーだが、傍にいる箒と鈴を見て  
どういう状況か瞬時に察して、呆れ顔になる。

パワージョーに元気よくあいさつをする鈴に返事をすると、  
ふくれっ面の箒へ、からかいがてらの助言を送る。

「盗られるつて、箒？お前、誰かに何かを狙われてるのか？」

「……はあ／＼／＼／＼／＼」

「あははははは！元気出しなつて！」

『お前は、そろそろ女心を勉強した方がいいぞ。マジで』  
『じゃれ合はるのは、それぐらいにするのであります』

一夏の見当違いの鈍感に箒は、小学生とは思えない深いため息をし  
その背中を鈴が笑いながらバシバシと叩く。

放課後のやり取りの中、ダンプソンが止めに入つた。

『パワージョー、早く一夏をデツカールームに。  
みんなが、待つています』

『つと！ いけねえ。それじやあな、みんな！

今度また来るからな。

行こうぜ、一夏！』

「おう！」

教室の窓から一夏は、パワージョーの手に乗り学校を後にする。

『さてと。では、筈どうするでありますか？

このまま、もう少しみんなとおしゃべりでもしますか？

それとも帰りますか？』

「今日は、帰つて稽古をするよ。

いつもすまない、ダンプソン」

『気にする必要は、ないでありますよ』

申し訳なさそうにする筈に、ダンプソンは笑顔で応える。

何故、ダンプソンが筈を迎えて来たか。

それは、重要人物保護プログラムというものが関係している。

ISの生みの親である篠ノ之束の身内となれば、よからぬことを企む者が  
出てくる可能性は極めて高く、身を守るために名前を偽つたり住居を  
移したりすることを政府が提案してきたのだ。

最も、それは筈達の身の安全というより束とのコンタクトを

取りやすくしたいという政府の思惑からである。

だが、事態はそんな大人の下らない考え方通りにならなかつた。

冴島がブレイブポリスを、篠ノ之家の護衛につけることを提案したのだ。

ブレイブポリスが護衛をすれば、それだけで篠ノ之家を脅かす者達への牽制になり、プログラムを実施する必要もない。

無論、反対する者達もいたが、最終的に東が政府よりもブレイブポリスの方が信頼できるし、何より筈も一夏と離れなくて済むからそつちの方が多いと打診してきたので、ブレイブポリスに一任されることとなつた。

ここで、東の機嫌を損ねれば日本のＩＳだけ機能停止になつてしまふことになりかねないからだ。

「ねえ、ダンプソン。一夏は、どんな事件を解決しに行つたのよ？」

『違いますよ、鈴。一夏は、事件が起きるのを“防ぎ”に行つたのですよ』

・・・・・

『しつかし、鈴は外国からの転校生だつてのに、学校にすぐえ馴染んでるな』

『元々親が日本の料理が好きだったとか何とかで、

日本に馴染みがあつたみたいだぜ？』

ショベルカーに変形したパワージョーの中で、一夏は鈴がうまく日本に溶け込んでいる理由を述べる。

所々で、日本についての知識が間違っていたりしたが、それがかえつてクラスに打ち解ける要素になつたようだ。

『それで？ お前としては、どつちが好みなんだ？』

「好み？」

『素直になれない不器用な大和撫子な幼馴染か、

元気いっぱいで世話を焼きクラスメート。

お前の本命は、つて話だよ』

「本命つて、一人はただのクラスメートで友達だよ』

『お前つて奴は……』

いつも通り平常運転の一夏に、パワージョーはため息をつく。

箒と鈴、どつちが本命かを尋ねたパワージョーだったが、鈴は箒と違つて一夏のことを友達としてしか思つていない。

ただ、一夏に絡んだ時の箒の反応がおもしろくて世話を焼けるから、箒をからかっているだけなのだ。

それは、パワージョーも分かつてゐるが、彼には確信があつた。

いづれ鈴は箒と一夏を巡るライバルになると――。

『わりい、遅くなつちまつた』

「ごめん、みんな！」

『遅いぞパワージョー』

「まあまあ、マクレーン。

箒の護衛に出たダンプソンを除いて、これでみんな揃つたんだから  
早速始めよう

デッカールームに到着したパワージョーと一夏は、勇太に促されて  
自分達の席に座りメインスクリーンへと体を向ける。

「さて、諸君。明日、日本に親善のためにツイール国の国王と王女が  
来日される。

ツイール国は、小さな島国だが貴重なアーメタルの輸出国だ」  
『訪問の途中で、テロリストによる誘拐や襲撃の可能性は十分に  
あり得る』

「二人は、対談の後日本の観光地をいくつか回る予定になつてゐる。  
デューケの懸念が当たるとしたら、そのタイミングになる可能性が高い。

護衛もそうだが、市民に被害が及ばないようにも十分気を付けてほしい」「了解です！」

冴島の言葉に勇太と一夏は、敬礼しデッカード達もそれに続く。

『にしてもよ～』

「うん。世の中、そつくりな人が3人はいるって言うけど……」

パワージョーと一夏が苦笑すると、勇太達も何とも言えない笑いを浮かべる。  
メインモニターには、鈴に瓜二つなツイール国の王女が映し出されていた。  
『だけど、王女様って一夏と同じ歳だよね？』

それなのに、国王様のお手伝いをするなんてすごいよね～』

『ところが、そうでもないみたいだぜ？ドリルボーカー』

『何でも、早くに妻を亡くしたからか、国王は

一人娘の彼女を溺愛しているらしいです。

今回、日本に連れてきたのも王女様が京都やスカイツリーを見たいからだとか  
なんとか』

『こりやあ、明日は相当難儀な護衛になりそうだぜ』

ドリルボーカーがまだ子供と言える王女に感心すると、

ガンマックスとシャドウ丸が語る情報に一同は肩をすくめる。

そんな一同の心情を代弁するように、ガンマックスが明日の護衛任務が厄介なものになるとぼやいた。

『……とまあ、何か起きるだろうとは思つていたけどよ』

「俺達、何かに憑かれているのかな？」

「じゃあ、今からお祓いにでも行く？」

「冗談を言つている場合じやないだろ……鈴!!」

護衛当日。

人目のつかないビルの裏側でパワージョーと一夏は、天を仰いで現実から目を逸らしたくなるのをこらえていた。

そんな頭を悩ます二人に元凶である鈴は、ケラケラと笑いながら

冗談を言うが、その姿は昨日確認したツイール国の中王女とそつくりであつた。  
「いや、こつそり抜け出した王女様がばつたり出会つたのは、

自分のそつくりさんで、一日だけ入れ替わつて思い出作りなんて、

マンガみたいなことを体験する日が来るなんて夢にも思わなかつたわ♪♪

「何呑氣にしてるんだよ、お前はつ……！」

能天気に状況を解説してみせる鈴に一夏は、本気で頭が痛くなつていく。

空港へやつてきたツイール国の国王を出迎え、会談地へ無事にたどり着いたまではよかつた。

だが、しばしの休憩時に付き人がスケージュールを王女に確認しようとしたら、王女は姿をくらませていたのだ。

その知らせを受け護衛のために残るデッカードとデュークを除くメンバーが、王女の探索に出たのだが、子供ながらにしつかり脱走ルートを考えていたのかなかなか見つからなかつた。

服を着替えた形跡はなく、王女は日本に着た王族の服をそのまま着ていると思われそんな目立つ格好なら目撃者もいると思われたが、思うように情報は集まらなかつた。

だが、一夏が王女は人目を避けるのではなく、逆に人目に付く場所を移動して目立たないようにしているのではと考え、付近のドレスを着ても目立たない場所を手分けして探したところ、とあるマンガのイベントがあつた。

近くにいたパワージョーと一夏がそこに向かうと、コスプレをした人の中に王女を発見してこの騒動は終わりと思われたのだが……。

二人が見つけたのは、王女の服を着た鈴だつたのだ。

一夏の推理通り、イベントにまぎれた王女はたまたま来ていた鈴と出会い  
身代わり作戦を思いついて、服を交換したのだ。

鈴もおもしろそうだと、入れ替わり作戦に賛同し一夏達に見つかって  
現在に至る。

『それで？ 王女は、どこに行つたんだ鈴？』

「うん？ 一人で、日本の下町つていうのを見たいんだつて〜」

「見たいって、お前……」

『どうする、一夏？』

王女だけじゃなく、鈴もほつたらかしに付て訳にはいかないぜ？』

「うん……待てよ？」

鈴に、このまま王女のフリをしてもらつた方がいいかも……。

そうすれば王女は俺達といふてみんな思うし、外でうろついている

王女も誰も王女つてわからないい……』

『鈴も一人にするより、俺達と一緒にいた方が安全つてわけか』

「探索はシャドウ丸に任せて、俺達は一端戻ろう。

『というわけで、お前にも責任はあるんだから付き合つてもらうぜ、鈴？』

「まつ、しようがなわいわね〜」

面倒ごとを起こした張本人である鈴は、楽しそうにケラケラと笑い声を上げるのを見つめ、一夏とパワージョーは深くため息をはくのであつた。

## 第5話 おさわがせ娘！ 中編

「こちら、アント1。ターゲット確認。

対象はE—37ポイントを、北へ移動中」

「アントK了解。ただちに捕縛準備にかかる。アント1は、そのままターゲットの監視を続行せよ」

「アント1了……まで！ターゲットは、ブレイブポリスと遭遇した！繰り返す！ターゲットが、ブレイブポリスと遭遇！」

「つ！アントKからアント1へ、ターゲットと遭遇したのは何体だ？」

「遭遇したのは、1体。

機体の色は、イエロー……BP—302、パワージョーだ。

そばには、ターゲットの王女と同じ年頃と思われる子供もいる

「噂に聞く、一人目の少年警官か……。

よし、アント1は先ほどの指示通り、ターゲットのプリンセスを

監視しろ。

ただし、ブレイブポリスの索敵範囲のギリギリ外からだ」

「了解……」

静かに相手に悟られず、悪意は忍び寄っていく——。

「ほらほら、あんた達？」  
ちや～んと、王女様をエスコートしなさい♪

「ホントに楽しそうだよな、お前！」

『今の状況、わかつてんのかね？』

本物の王女をシャドウ丸が見つけるまでの間、王女のふりをしてもらうことになつた  
鈴だつたが、呑気に楽しんでいる彼女に一夏とパワージョーは頭が痛くなるのを  
押さえられなかつた。

「いいか、鈴？」

俺達もお前を守るけど、お前自身も気を付けてくれよ？

そうやつて、気楽に考えていると痛い目に合うぞ」

「平気～平気～。心配しすぎよ、あんたは～」

『こういうのを、何かが起きるフラグって言うのかね～？』

「おい、やめてくれパワージョー！」

それは、本当にシャレにならないフラグだぞ!!!」

次々と何かが起きる時のお約束とも言えるフラグを立てていく、  
鈴とパワージョーに一夏は大声でツッコミを入れる。

そして、一夏は知る……。

「GO——！」

一度立つたフラグは、止められない。

『つ！

氣をつける、二人とも！何か来る！』

「つ！」

センサーでこちらに近づいてくる複数の足音を察知したパワージョーは、  
素早く一夏と鈴が自分に隠れるように立つと同時に彼らの視界が  
煙でおおわれる。

「きやつ！何よ、これ！」

「煙幕つ!?」

『へつ！こんなもので、俺の目を封じたつもりかよ！  
ロボットの俺に煙幕なんか……がつ!!!』

「パワージョーつ!?」

突然視界を遮られて混乱する鈴と一夏だつたが、ロボットであるパワージョーは各種センサーで周囲を探るが、その体に電撃が走り膝をつく。センサーが後ろの首元に何かを検知し、それが電撃を放っているようだ。

『い、一体何だ……!?』

「思つた通り……心を持ったことで性能は上がるが、同時に

人間のような心理的油断が生まれるのが、ブレイブポリスの弱点のようだな」

思うように体を動かせなくなつたパワージョーの傍には、暗視ゴーグルのようなものや

体中に特殊装備と思われるものを装備した何者かが立つていた。

声や体格からして男だということがわかるが、覆面で顔を覆つているためそれ以上のことは分からなかつた。

オマケに何かの機械を使つてゐるのか、声にも雜音が入り解析できなかつた。

「油断があつたとはいえ、

貴様たちブレイブポリスから流出した隠密回路や白騎士のステルス機能を参考にした特殊スーツは、試作段階だがまづまづの性能だな。完全に貴様の隙をつくことができた」

『お、お前は……』

「きやつ！ ちよつと、何すんのよ！」

「うわっ！」

自分の前に現れたのは間違いなく敵で、狙いは王女かとパワージョーが  
考えた瞬間、鈴と一夏の悲鳴が煙幕の中から響き渡る。

『つ！ てめえら、待ちやがれ！』

「動かない方がいい。今、我らの手には王女だけでなく、貴様達のお仲間という  
人質がいる。

王女はともかく、あの少年はこの場で消してもいいんだぞ？」

『こ、この野郎つ！』

「もつとも、動きたくても動けないだろうがね。  
倒すことができなくとも、運動回路を麻痺させれば動きを阻害することぐらいは  
できる……」

煙幕の中から聞こえた悲鳴で、二人ともさらわれてしまうと、  
助けようとするパワージョーだつたが、

体に流れる電撃によつて動きを封じられた上、誘拐犯の一人から一夏の命をちらつか  
され

完全に手を出すことができなくなつてしまふ。

その間に煙幕は、晴れていくがもうどこにも鈴と一夏の姿はなかつた。  
「では、我らの目的が成し遂げられるまで、しばらくここで休んでいるといい、  
ブレイブポリスよ……」

『うわっ！？』

パワージョーの傍にいた男は、パワージョーの目に銃口を向けると  
ペイント弾を放ちその視界も完全に封じる。

『ちつくしょおおお!!!』

体の動きと視界を封じられたパワージョーは、走り去る足音に  
叫び声を上げるしかなかつた。

・ · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

「はあ！あの子は、まだ見つからないのかい？」

「申し訳ありません。手分けして探しているのですが……」

「いや、謝らなければならないのは、こちらの方だ。

娘が騒がしてしまつて、すまない」

会談地の会議室で、勇太はツイール國の國王と共に、ブレイブポリスの  
仲間達からの連絡を待つていた。

『聞こえますかい、ボス？

ちよいと、面倒な知らせが……』

「シャドウ丸、どうしたの？ 何かあつたの？」

『ええ。

パワージョーと一夏から、連絡があつたんですが……。

どうも、王女は人目を避けるために一般人の服に着替えて  
人ごみにまぎれたようで』

「あ～～～、それはまた……」

シャドウ丸からの連絡に、勇太は天を仰ぎ国王もため息をこぼす。

会談地の護衛もあるため、捜索に割くことができるメンバーも限られている  
というのに、捜索が更に困難となつてしまつた。

『そんなに気を落としなさんな。

朗報もありますぜ？

王女が向かつたと思われる行先と着ている服の情報を入手して、

しかも鈴そつくりの顔となれば……』

「そうか！ シャドウ丸なら、それだけ情報があればすぐに見つけられる！」

『ええ。

まあ、その行先もいくつか候補はありますが、一夏から知らせを受けた近場から探索を開始していきます』

「わかった。頼んだよ、シャドウ丸……あれ？」

そう言えば、それを知らせてくれたって言う一夏とパワージョーは？』

シャドウ丸から続いて入った知らせに、勇太は肩の荷が少し軽くなるのを感じたが、ふと気になつたことを尋ねる。

『それなんですが、どうも一人は鈴と一緒にいるそうで。

何でも鈴が王女様と服を入れ替えたとか……』

「え……えつつつ……！」

「何をしておるか……」

『それでは、私は搜索に戻りますのでこれで』

「あっ！ ちよつ！ シャドウ丸！」

軽くなつた肩の荷が再び重くなるような情報に、勇太は慌てるが

それを知らせたシャドウ丸は早々に通信を切り、後の対処を勇太へと

放り投げる。

「はあ～全く次から次に……」

「重ね重ね、うちの娘が迷惑をかけてすまない」

これからまた厄介なことが起きる予感を感じて、勇太が頭を押さえるのを見て国王が再び謝罪の言葉を口にすると、勇太の手帳にまた連絡が入る。

「はい、こちら勇太どうす」

『すまねえ、ボス！ 大変なことになつた！』

「パワージョー！ 何があつたの!?」

勇太の返事を待たず、切羽詰まる慌てた声を出すパワージョーに、勇太はただならぬ気配を感じる。

『例の王女様と服を入れ替えた鈴と一夏が、誘拐された！  
俺がついていながら、すまねえっ！』

「な、なんだつて!?」

些細な出来事をきつかけに、事態は動いていく——。

・ · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

「うつ！」

「——つたあくく。何すんのよ、あんた達!!」

煙幕の中で捕まつた一夏と鈴は、誘拐犯達に担がれ車に乗せられると

しばらくそのまま移動し、廃工場と思われる場所に少々乱暴に降ろされる。

「噂にたがわぬ、お転婆つぶりだが、

大人しくしてもらおう。

交渉のための人質とはいえ、静かにさせるために多少乱暴なことをするのも致し方ないからな」

自分達の状況が見えていないのか、目の前の相手に食つてかかる鈴だったが、相手は小動物に威嚇されたぐらいにしか思つておらず、微塵も余裕を崩さなかつた。

それどころか、人質と言えど身の安全も保障しかねると淡々と脅しをかけてきた。マスクで表情はわからないが、何か信念じみたものを感じて自然と一夏は身構える。

「さて、まずは妙なことをしないように腕を縛るとしよう。

それから、少年警官君？

発信機の類を使おうとしても、無駄だと言うことを最初に言つておこう。

君達を連れてきた車にも、ここにも、電波を遮断する特殊な仕掛けをしている……」

「電波を遮断つてことは、通信もできないか……。

お前達の目的は何だ！」

アントKと呼ばれていたリーダーらしき男が、手で合図を送ると部下達は一夏と鈴の腕を

後ろで縛つて動きを封じると、余計なことをしないように釘を刺す。

残されたパワージョーから、自分達が攫われたことはすぐにブレイブポリスのみんなに伝わる。だが、自分達が今いるこの場所を探してもらうことも知らせることもできない

状況に一夏は顔をしかめるも、せめてと言わんばかりにリーダー格の男をにらみながら、誘拐の目的を聞き出そうとする。

「わざわざ教えるとでも？」

心配しなくとも、君はブレイブポリスを抑えるため、

王女殿は利用のためという使い道がある以上、命の保証はしよう。  
人質は、生きていてこそ意味があるし価値がある……」

「くっそお……」

「ふん！ 残念だつたわね、あんた達。

色々企んでいるみたいだけど、全部無駄よ！ 無駄！

そもそもあたしは……」

「つ！ 王女様！ 悔しいのはわかりますが、ここは

逆らつちゃダメです！」

「はあ～？ あんた、何言つて……」

「少年警官の言う通り。しばらくは、大人しくしてもらおう。

子供を大人しくさせる経験などほとんどないから、何をするかわからんよ？」  
調子に乗つたり子供だからと侮つたりせず、誘拐犯は一夏に余計な情報は渡さず取引のための道具として扱おうとする。

負けじと、鈴は目的である王女と自分を間違えて、そもそもこの誘拐がご破算になつていることを教えようとすると、一夏に止められ、

そのまま二人そろつて物置みみたいな部屋に連れていかれ、閉じ込められる。

「こらあああつー出しなきあああい！！」

「落ち着けって……」

「あんたは、何でそんなに落ち着いてんのよ！

つて言うか、何でさつきあいつらの誘拐が失敗してるつて

教えてやらなかつたのよ！」

「教えてたら……お前、死んでたぞ多分」

腕を縛られながらも悔しさからジタバタと暴れる鈴に、一夏は顔がくつつくかと思えるぐらい近づけると、耳元でボソッと小声でささやく。

「えっ？」

「あいつら言つてただろ？」

人質としても価値があるから、命の保証をするつて。

逆に言えば、利用する価値がなかつたら保証しないつてことだ。

そうやつて割り切る奴が、赤の他人で利用価値が無い人質にならない人質を生かすと思うか？」

一夏から告げられる言葉に、鈴はサートと血の気が失せていくのを感じた。もし、一夏が止めていなかつたら死んでいたかも知れない現実にようやく理解が追い付き、その場に座り込む。

「だから、自分が王女じやないつて言うのは、絶対に言うなよ？」

「う、うん……わかった……」

「よし！ それじゃあ、反撃といくか♪」

「反撃つて、何する気よ？」

部屋の外に声が漏れないよう小声で話しながら、消沈する鈴に不敵な笑みを見せる。

「王女と少年警官を返してほしければ、

各国に輸出しているレアメタルひと月分を用意し、  
プレイブポリスは妙な動きを見せるな……要求がなされない場合、  
二人の命の保証はしない……くそつ！」

誘拐犯めえつ！」

国王と勇太達の元に送られてきた誘拐犯の要求に、勇太は怒りを  
隠せなかつた。

『身代金として、レアメタルを要求しているとなると、

単なる誘拐ではないな。

レアメタルは、確かに貴重な資源だが、金に換えるとなると  
様々な手続きが必要になる』

『デュードの言う通り、犯人達の目的は金ではなく

レアメタルそのものということか……。

だが、この私達が妙な動きを見せるなというのがネックだな』

『そうだな。

どこまでが妙な動きなのかそうでないのかが、ハツキリしていない

以上、下手に動くことができない』

要求してきた内容に、デュークとデッカードは引っかかるものを感じるが、それよりももう一つの要求に頭を抱える。

マクレーンが言うように、この要求は動きを見せるなど言っているものなのだ。『それじゃあ、このまま黙つて指を加えていろいろつて言うのかよ！』

「落ち着いて、パワージョー！」

『そうだよ。動けるようになつただけで、ダメージはまだ残つているんだよ』

今にも飛び出していこうとするパワージョーをドリルボイドが、止める。

連絡をしたパワージョーは、何とか自力で機械を外し、カメラアイのペイントをふき取り簡単な応急修理をしただけの状態でここにいた。

『少しは、落ち着けって。

焦る気持ちはわかるが、頭に血が上つてちや、助けられるもんも助けられねえぜ？』

『ガンマックス……』

「すまない、諸君。

娘のせいで、こんなことになつてしまつて……。

犯人達の要求は、攫われたのが娘なら大臣達を説得できるのだが、

そうでないとなると、申し訳ないが……

『そんなあつ！』

国王が申し訳ない顔で、攫われたのが自国と関係のない他国的一般人と警官では、要求を呑むのが難しいと告げると、ドリルボーアが絶望的な声を上げる。

『いえ、一国の王として当然の判断です。

攫われたのは、私達の仲間とその友。ならば、彼らは私達が必ず助けます！』

「大丈夫さ、ドリルボーア。

『一夏がいるなら、きっと……』

『来ました、ボス！

『一夏からの発信信号です！』

「よつしやあつ！」

顔を伏せる国王に、デツカードは力強く二人の救出を成功させると告げると、彼らが待っていた知らせが舞い込む。

「こんなことあろうかと、色々仕込んであるんだよね～」

イタズラ小僧の目をして、一夏は靴底から小さなノコギリのような

・・・・・・・・・

刃物を取り出し、器用に手の縄を切つていく。

「あいつらが、俺のこととなめてくれて助かつたぜ。

手帳を取り上げただけで、身体検査とかもしなかつたし、腕を前に縛つてくれたからこれを取り出すのも難しくなかつたしな」

「色々つて……あんたそんなのをいつも持つてるの？」

さらりと忍者みたいに、隠し道具の存在をちらつかせる一夏に

鈴は小声で尋ねる。

「備えあれば患いなしつてね！」

勇兄も捕まつたりすることが、多かつたからな。

こうやつて、捕まつても自力で逃げるぐらいの道具は持つているのさ。

それに、こういうのを仕込むのも作るのも楽しいしな♪」

「あんた……もしかしなくとも、この状況を楽しんでいたりしない？」

誘拐されて閉じ込められていると言うのに、どこか楽し気な一夏を

鈴は訝し気な眼差しを送る。

「そんなわけないだろ……よし！

何とか縄を切ることができたな。

次は……こいつだ！」

縄を切つて自由の身となつた一夏は、次に腕時計に手を伸ばす。腕時計なんか外して何をと思う鈴の目の前で、腕時計はクモへとその姿を変える。

「な、何なのよそれ……！」

「静かに！これは、色んな機能を持つたポリス・ガジエットの一つだよ。超A-Iは無いけどある程度自分で動くことができる。それじゃ、バイオウオツチ。

「ここに俺達がいることをみんなに知らせるんだ」

スペイダーウオツチと呼ばれたメカは、一夏の言葉に了解したとばかりにうなづくと壁を伝つて、子供ではとても届かない高さにある格子がはめられた窓の隙間から外へと向かつた。

「後は、あいつが電波を遮断する仕掛けの範囲から出て、勇兄達に

この場所を知らせてくれば、俺達の逆転だ」

「……あんたつて、警察官よりスペイとかの方が向いてるんじゃない？」

「うん？」

マジシャン顔負けの鮮やかな一夏の脱出劇の下準備に、鈴は呆れ顔で彼が就いている職業が間違っているのではないかと感じる。

「さてと……もう2、3個ほど仕掛けるとしますか♪」

一夏は鈴の言葉を気にせず、先ほど以上に『ニンマリ』とした笑みを浮かべながら懐に手を入れた……。

「王女と少年警官の様子はどうだ？」

「閉じ込めたら、すぐに大人しくなりましたよ。

王族だ、特例だとか言われても、所詮子供は子供つてことですね」

「そうか……。

間もなく指定した時間となるが相手は、あのブレイブポリス。

油断しない方が賢明だろう。

警戒を怠るな」

「そこまでする必要がありますかね？」

「ここが知られないよう逆探知対策は、何十にもやつてますし、何より少しでも動いたら人質の命はないって言つてますぜ？」

「用心するに越したことは無い。」

「万が一ということが起きるのが、この世界だ」

ドオオオン!!!

誘拐犯達がもうすぐ目的を達せられると氣を引き締めながらも緩んだ隙を見計らつたように、爆発音が廃工場に響き渡る。

「なになになに！！？」

「来たか！」

爆発音は、当然一夏と鈴の耳にも届き突然のことには鈴は慌てふためくが、一夏は來るのが分かつていていたかのように慌てることはなく、自分達の足元から聞こえてくる何かを“削るような音”に笑みをこぼす。

「今度は何よ！」

『お待たせ、一夏！大丈夫！』

「ドリルボーキー！」

一夏と鈴がいた床が盛り上がつたと思つたら、そこからドリル戦車が現れドリルボーキへと変形する。

幸い、二人が閉じ込められていた部屋はロボットが動けるぐらいの広さはあつたため、崩れることは無かつた。

「おい！今の音は……なあああつ！？」

『おうつと！そこまでだ、誘拐犯！

ブレイブポリスだ。大人しく投降しろ!』

「くそっ!」

「おじさん、足元にご注意を!」

異変に気付いた見張り役が部屋の中に入つてくるが、

ドリルボイは素早く一夏と鈴の前に立つと投降を呼びかける。

分が悪いと見張り役は悪あがきとその場から逃げ出そうとするが、

一夏はそんな見張り役に忠告を告げながら“なにか”を

地面に置く。

「あん? 何だこりや?」

一夏の言葉に思わず自分の足元を見ると、見張り役の足コンコンとぶつかっている  
ミニカー? らしきものがあつた。

「おもちゃか?」

『……♪』

場違いなソレに啞然としているとミニカー?は、人型へと変形し  
手に持つていたものを投げつけた。

バババババババン!!!

「だあつ!! たたたたたた!!!」

ミニ一口ボットが投げつけた爆竹に驚いて、見張り役は情けない悲鳴をあげる。

「今之内だ、ドリルボーイ！」

『わかった！』

見張り役が驚いて出来の悪いダンスを踊っている隙に、

ドリルボーイは一夏と鈴を抱えると再びドリル戦車に変形し、

そこから脱出を図る。

「ちよつ！ 何してんのよ／＼＼＼＼＼＼＼＼！？」

「仕方ないだろ、ドリルボーイに乗れるのは一人なんだから！」

ドリル戦車となつたドリルボーイの搭乗席で構造上、鈴は

一夏の膝の上に抱えられる形となつていた。

お姫様抱つこに見えなくもない体勢に、否が応でも鈴の顔は赤くなる。

『二人とも、イチャイチャしている場合じやないよ！』

「バカなこと言つてないで、急いで！

さつきの爆竹は、音がすごいだけで相手を驚かすだけなんだから！」

「だ、誰がこいつなんかとイチャイチャしてるのよ／＼＼＼＼＼＼＼＼！」

狭い席の中で騒ぎながらも、一人を乗せてドリルボーイは脱出を

開始した。

「状況を！」

「はつ！正面入り口に、ブレイブポリスが現れ攻撃を受けています！」

「奴らどうやつてここが……いや、それより何のつもりだ。

人質がいることを忘れているのか……？」

奇襲を受けた誘拐犯達は、自分達に攻撃を仕掛けている相手に驚愕する。

人命を優先するブレイブポリスが人質に構わず、攻撃をしているのだ。

待て。今姿を見せてるのはビルドチームだが、一体……

地中を移動できるドリルボイという機体がいない……。

それに攻撃も突入や殲滅と言うより……。

すぐに王女と少年警官を確認しろ。

まんまとやられたかもしけん……」

アントKは、ビルドチームの攻撃に引っかかりを覚え、

一夏と王女（鈴）の様子を確認しようと部下を走らせる。

電波遮断の仕掛けは自分達の間の通信にも影響を及ぼし、

自らの目と足で連絡と確認するしかないのだ。

『そうやつて、二人の様子を確認しに行つた者達が、一夏が仕掛けたミニカーロボによつて見張り役と同様に混乱させられ、内部間の連絡網がズタズタになるのは数分後のことであつた。

『全く、ボスも大胆な作戦を立てる……！』

『そうでありますな。

ドリルボーアの力を使つて、自分達が奇襲を仕掛け、

その間にドリルボーアが一夏と鈴を救出する』

『で、俺達は敵の目を引き付ける囮役……つと！

こんな作戦、一夏が相手を出し抜かぬきやできないぜ』

マクレーン、ダンプソン、パワージョーの三体は廃工場には

当たらないようにしつつ自分達に注意を向ける程度に弾丸を放つていく。

『恋愛方面とは別に、一夏の将来が不安になつてくるな』

『噂の筹备の姉ちゃんみたいにならなきやいいよ……な！』

『流石にそれは無いと……願いたいであります……』

一夏が作つてくれたチャレンスだつたが、その手腕に一抹の不安を感じる  
ビルドチームであつた。

## 第6話 おさわがせ娘！ 後編

「あの子供を甘く見ていたな……！」

アントKは、モニターを見ながら苦々しく呟く。

そこには、こちらに攻撃を仕掛けているビルドチームにドリルボーイが合流し、一夏と鈴が降りるのが映し出されていた。  
「奴らがここを突き止めたのも、こちらの連絡網が機能しなくなつたのも彼の仕業か……。」

徹底的に、身体検査をして動けなくするべきだった」「どうしますか？」

「……」うなつては、計画は失敗だ。

後は、被害をどれだけ減らすかとなる。

“アレ”を起動させる！

「はっ！」

最早、自分達の計画に成功は無いとアントKはすぐさま自分達の失敗を悔やむ思考を切り替え、今取るべき最善の行動を実行に移す。

「みんな！」

『無事だつたか、一夏！』

『よし！後は、突入して犯人達を逮捕するだけだ。』

行くぞ！

一夏と鈴が脱出できたことに、パワージョーは安堵の声を上げ、マクレーンが最後の仕上げと廃工場に突撃しようとした時、不意に何かの起動音が、一帯に聞こえる。

『あの廃工場からであります!』

音の出所が目の前の廃工場からだと警戒するビルドチームの前で、廃工場の天井を  
破壊しながら、彼らのように工事用車両をモチーフにした巨大なロボットが姿を現し  
た。

「うえええつ  
!!!?」

「あいつら、あんなのまで用意してたのか！」

「こうなつてしまつては、こちらの情報を掴ませないために撤退するしかないが、そのための時間を稼がせてもらう。

連絡が取れなくとも、こいつが出たとわかれば全員撤退行動に入るよう予め、指示はしてある。

『このボンバー03がなつ！』

「でも、アントK？」

『別に、あいつらを倒してしまつてもかまわないっすよね？』

『無論だ。ついでに、ボンバー03の稼働データと奴らのデータも入手する！』

鈴と一夏が驚きの声を上げる中、ボンバー03はハンマーを半分にしたような手をビルドチームに振り下ろす。

『危ねえつ！』

『くつ！』

『とんでもないパワーであります！』

『あんなの喰らつたら、ひとたまりもないよぅ！』

一夏と鈴はパワージョーが抱え、ボンバー03の攻撃を躱したビルドチームだつた

が、

拳一つで簡単に巨大なクレータを作ったボンバー03のパワーに驚愕する。

『よし！合体するぞ、みんな！』

「何言つてゐんだよ、パワージョー！」

お前、その体ちゃんと修理してないんだろ？  
そんな体で合体なんて、無茶だ！」

『大丈夫、心配すんなつて。

こんなもん、気合で何とかならあつ！

それに、万が一何かあつても、お前がいるからな』

「パワージョー……」

「ちよつ！あんたねえつ！」

メカニックの端くれである一夏は、パワージョーが今どんな状態なのか

すぐにわかつたが、パワージョー自身もそれを分かつた上で言つているのだ。

相手は、とても合体しないで勝てる相手じやないと。

そんな彼に鈴は、怒鳴り声を上げる。

「一夏は、あんたのこと心配してんのよ！  
わからぬのつ！」

『そんなのお前に言われなくともわかつてゐるさ……。

一夏もボスも誰よりも優しいつてことぐらい。

だけど頼む、一夏……』

「わかった……」

「一夏っ!?」

『サンキューー!』

パワージョーの言葉に一夏も意を決して頷く。

鈴が驚きの声を上げたのと同時に、彼が敵を錯乱するのに使ったミニカーロボが奪われた一夏の手帳を持つて彼らの足元に現れる。

「戻ってきたか、ミニイ！」

『よし、一夏！合体命令を！』

「おう！って、みんな別に合体命令なくとも合体できるだろ」

『それは違うのです！』

『やつぱさう。あの掛け声があると気合が入るんだよね♪♪』

『わかったよ……いくぞ！』

準備は整つたとばかりに、マクレーンは一夏に勇太の代わりに

合体命令を出してくれと頼む。

機械生命体へと進化した彼らは、自分達の意志で合体することができるのだが、

合体命令を出すときの掛け声が彼らのルーテインになつていてるようだ。

「ブレイブアップ！スーパービルドタイガー!!!!」

一夏が警察手帳を掲げると手帳が開き、中にあるブレイブポリスのマークが輝く。同時に、ビルドチームは空へと上がり合体を開始し、それぞれが一度、ビーグル形態になつて変形していく。

ダンプソンは左右に分かれ、両足に。

パワージョーはキヤタピラが分離し、車体が左腕に。

マクレーンは車体の後部が回転し、胴体に。分離したクレーン部は、右腕に。変形した各部は、胴体となつたマクレーンとドッキングしていき、大型ロボットビルトタイガーを形成する。

更に、ドリルジエットとなつたドリルボイド、前後に分かれ

胸部装甲、脚部、大型ウイングとなりビルトタイガーへとドッキングしていき、合体が完了する。

『スーパービルドタイガー!!!』

堂々と名乗りをあげるスーパービルドタイガーに、  
ボンバー3は若干後ずさる。

「スーパービルドタイガー……その名の通り胸に虎の顔がついているが……何でそんなものが付いているんだ？」

「かつこいいから……なわけないすよね」

「何バカなこと言つてるんだ！」

『氣を引き締めろ！』

ボンバー03のコクピットで、合体したビルドチームの姿に名前通り虎の顔がついていることに首を傾げるアントKと部下二人だつたが、

その理由があり得ないとつぶやいた

『カツコイイから』 というのがまさかの正解だとは夢にも思わなかつた。

「先手必勝だ！」

ボンバー03は、半円状の手を合わせ巨大なハンマーになるとスーパービルドタイガーに

向けて射出する。

『くつ！すごいパワーだつ！』

スーパービルドタイガーハンマーを受け止めるが、押し返すこともできず

拮抗状態となるが長くは続かなかつた。

『うつ！』

『パワージョー！』

『ヤバイ！押されるつ！』

やはり、パワージョーが受けたダメージは少なくないのか、左腕の力が

一瞬緩み、そのままスーパービルドタイガーはハンマーに吹き飛ばされる。

「どうやら、相手は万全でないようだ。」

あの少年警官を誘拐したのは、無駄ではなかつたようだな！」

スーパービルドタイガーの不調を見抜いたアントKは、一気に攻勢に出る。

ボンバー03は飛び上がり、その腕をスーパービルドタイガーに叩きつけようと

振り上げる。

『つ！ なめんなつ！』

振り下ろされた腕をかわしたスーパービルドタイガーは、攻撃をかわされてできた隙

を

突いて、ボンバー03の顔に飛び蹴りを入れる。

『なつ！』

『効いていない!?』

「バカめ！」

その程度の攻撃で、ボンバー03の装甲はビクともせんぞ！」

飛び蹴りのダメージが入った様子のないボンバー03は、逆にスーパービルドタイガーの

懷に拳を叩き込む。

『『『うわつつつ！』』』

「スーパービルドタイガー！」

「ああ、もう！言わんこつちやないのよ！」

劣勢となるスーパービルドタイガーに鈴は、頭をかきむしる。

「やつぱり、無茶だつたのよ！」

早く逃げないと……一夏つ！」

「……」

このままでは負けてしまうと、鈴は逃げようと言うが、一夏は視線を動かさずあるものを見つめる。

『どうしよう！このままじゃ！』

『確かに、少し厳しいな……』

『ははは……ちょっとカツコつけすぎたかね？』

『今更そんなこと言つても仕方ありません！』

『ダンプソンの言うとおりだ、ドリルボーキ。

忘れたか？

心を一つにした我々は——』

『『『無敵のブレイブポリス！』』』

『ごめん。ちょっと弱気になつてた！』

『俺もだ。わりい。

俺達が力を合わせれば、どんな敵も怖くない！』

『本番はここからであります！』

「みんな！ ちょっと聞いて……」

ボンバー03に吹き飛ばされたスーパービルドタイガーが、  
反撃に出ようと立ち上がる。すると、一夏から通信が入る。

「噂のブレイブポリスもここまでみたいですね」

「所詮、噂は噂。それに技術は日々進歩してゐるんだ。

奴らが過去の遺物になるのも当然さ」

「……」

ボンバー03のコクピットで、もう決着が見えたのか緩んだ空気が  
流れるが、アントKはこのままでは終わらないと感じていた。

『『『うおおお!!!』』』

「性懲りもなく！」

「しかも正面からかよ！」

何の策もなく正面から突っ込んでくるスーパービルドタイガーに、ハンマー攻撃で

迎え撃とうとするボンバー03だつたが……。

「今だ！ブレイブアウト！」

『『『おう！』』』

ハンマーが当たろうとした瞬間、スーパービルドタイガーは合体を解除し、攻撃をかわす。

「何ッ!?」

『そこだつ！』

『シユ～～ト！』

予想外の事態に、ボンバー03が動きを止めた隙にマクレーンとドリルボーイがボンバー03の膝関節を狙つて攻撃する。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「みんなー、ちょっと聞いて。

あのロボット、パワーもすごいけど、多分ビーム攻撃も通じないとと思う」

『どういうことだ、一夏！』

「あいつが攻撃を受けた部分。

攻撃を受けたにしても、塗装が剥がれすぎている。

簡易的な塗料タイプの耐ビームコーティングをしているんじゃないかな?」  
ボンバー03を観察し、弱点を探していた一夏はスーパービルドタイガーに見抜いた敵の能力を説明する。

「耐ビームコーティングの塗料は、黄色っぽくなるし衝撃で剥がれやすいから十中八九間違いないと思う」

『それじゃあ、奴に勝つには……』

『物理攻撃しかないということありますな』

「うん。だから、そのために……」

・・・・・・・・・・・・・・・・

『(パワー自慢のロボットの一番重要な箇所、自分の体を支える  
下半身の関節部分!)』

『(そこを狙うために、敵の攻撃を引き付けて分離。

ピンポイントを狙えて破壊力もある僕のサッカーボムとマクレーンの  
ショットガンで攻撃!)』

マクレーンとドリルボーイの攻撃が関節に命中し、ボンバー03は  
体勢を崩し、バランスを取ろうと両腕を開いてふらつく。

『ほお……たあっ!!』

『ぬん！』

ボンバー03がふらつき生まれた隙を狙つて、パワージョーとダンプソンが無防備に近い、

両腕のハンマー部分にそれぞれの武器で攻撃を仕掛ける。

『（二人の攻撃で、バランスが崩れたところを、俺とダンプソンが

こいつのハンマーを破壊する！）』

『（球状のハンマーを正面から壊すのは難しくても、ハンマーになる前！両腕が接合する面を狙えば……！）』

こちらの奇襲攻撃に、敵は対応できず一夏の作戦通り、メイン武器であるハンマーを破壊できると誰もが思つた——。

『なつ！？』

『うおつ！？』

だが、パワージョーとダンプソンの攻撃は破壊するどころか、強固な装甲にはじき返され今度は二人が無防備な姿をさらしてしまった。

「吹き飛べ！！」

『危ない！』

『やらせるか！』

ボンバー03の反撃を受けそうになつたパワージョーとダンプソンは、紙一重でマクレーンとドリルボーイに助けられる。

『もう一度、合体だ！』

『『おう！』』

攻撃を躊躇したマクレーン達は、再びスーパービルドタイガーヘと合体する。「ふん。

万策尽きての奇襲だったのだろうが、ここまでだ！」

アントKは、合体を解除して意表を突いた奇襲を仕掛けてきたことから、最早敵に打つ手はない、止めを刺すべくボンバー03のフルパワーでハンマー攻撃

を

放とうと両腕を構える。

「……よし。作戦通りだ！」

戦いの様子を見ていた、一夏は狙い通りに事が運んで、拳を握りしめる。

・ · · · · · · · · · · · · ·

『正面から突っ込むと見せかけて分離し、相手の武器を破壊するか……』

『悪くないと思います』

『それじやあ、早速……！』

「待つて。

分離して相手の隙を作つても、合体前のみんなの攻撃力じやあのハンマーは壊すことができないとと思う」

『おいおい、それじやあ意味ねえじやねえか』

自分で言つた作戦でありながら、それを否定することを口にして、パワージョーが呆れた声を上げる。

「確かに壊せないだろうけど、完全につてわけじやない」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『（一夏の狙い通り、俺達の奇襲攻撃を乗り切つたと思つて、

フルパワーの攻撃をしようとしてやがる！）』

『（そう、さつきの自分達の攻撃の本当の狙いは……

両腕がハンマーとなつた時、攻撃がめり込みやすくなるような傷をつけること！）』

『（一点集中！その傷に、僕たちの全力と……）』

『（敵の全力が加われば——）』

「終わりだ！プレイブロリス！！」

スーパービルドタイガーでも受け止めきれない程の威力のハンマーが、  
今度はフルパワーで放たれる。

『『』（勝てるっ！！）

タイガーギムレット！！』

スーパービルドタイガーは、ドリルボイを先頭としたビーグル形態での  
直列状態となり、向かってくるハンマーに正面から突撃する。

「なつ？！」

「あああつ！」

「……いつつつけえええ！！！」

アントKと鈴がそれぞれ驚きの声を上げ、一夏がビルドチームを後押しするように  
大声を上げる。

均衡したのは一瞬——。

タイガーギムレットは寸分たがわずに、パワージョーとダンプソンの攻撃によつて  
できたくぼみにドリルの先端をねじ込み、ハンマーをボンバー03が後押しする形も  
相まつて、ハンマーを容易く破壊する。

そして、その勢いのまま、ボンバー03の体を貫き風穴を開けた。

「な、なにいつ？」

「そんなバカな！」

「ちつ！脱出だ！」

センサー攪乱チャフ、光学迷彩……急げ！」

止めを刺す攻撃をしたはずが、一転して自分達が敗北するという信じられない事態にアントKは混乱する部下二人を叱咤し、急いで脱出装置を作動させる。

「やつたぜ、みんな！」

「勝つちやつた……」

タイガーギムレットによつて貫かれたボンバー03が爆発する様を一夏が声を上げて喜ぶのとは対照に鈴は呆然とした声で呟いた。

『後は、あのロボットを動かしていくた犯人を捕まえるだけだ！』

『逃しはしないぜ！』

『その通りでありm……ぐつ！』

『な、何これ！？』

スーパービルドタイガーは、最後の仕上げとボンバー03に乗つていた犯人を逮捕しようとするが、その視界に突然、ノイズが走る。

「どうしたんだ、みんな！」

『セン……サー……働……い』

スーパービルドタイガーが、頭を抱えるようにして動きを止めるの見て  
通信を試みる一夏だつたが、ラジオのチャンネルが合わないように戻つてきたのは、  
途切れ途切れの言葉だつた。

「ちよつと！ ホントに、どうしたのよ！」

「通信妨害？ いや……違う！」

何かが、センサーを攪乱してるんだ！」

突然起きたセンサー系の異常に、一夏は急いで辺りを見回すがもう手遅れであつた。  
戦闘以外でセンサーを狂わせるなど、逃走する以外に考えられないと、  
一夏は最後の最後で誘拐犯達にしてやられたことに悔しさで、拳を叩く——。

・ · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·

「そういうわけで、犯人達には逃げられちゃいました……」

『すまねえ、ボス。油断しちまつた』

アントK達誘拐犯には逃げられたものの、ボンバー03を撃退した

一夏達は、会談地へと戻り勇太へ事件の顛末を報告した。

「ううん。一夏も鈴も、無事でよかつたよ」

「ブレイブポリスの皆さん。

この度は、私の娘が迷惑をかけてしまい、本当に申し訳ない」

事件解決とは言い難かつたが、勇太はそれよりも二人が無事に戻つてきただことに安堵し、ツイール国の国王は頭を下げて謝罪をして、勇太達を慌てさせた。

「あ、頭を上げてください、国王！」

「俺も鈴も大丈夫だつたんですから！」

『一夏とパワージョーの話からすると、誘拐犯達は用意周到に準備をしていたようです。』

王女が抜け出すことを想定していたプランが、立てていたいくつかの中にあつたのでしよう』

『王女が抜け出さなくとも、何らかの形で事件は起きていた……か』

一国の王が頭を下げるなど、それだけで大事である。

勇太と一夏は、大慌てで問題ないと告げ、デッカードとデューケが擁護する。

「それでも娘の軽率な行動がきっかけなのは事実だ。

だからこそ、謝罪せねばならない』

『お取込み中、失礼しますよ』

『待たせたな』

「シャドウ丸！ ガンマツクス！」

『よう、一夏。色々とスペイ顔負けの活躍だつたみたいじゃねえか？』

『本格的に、シャドウ丸に弟子入りでもしたらどうだ？』

『それは、おもしろそうだ。私は構いませんぜ？』

「スペイや忍者な一夏……。

何だろう。とんでもないことになる気がする』

「ん？ 一人が戻つてきたということは……」

そんな中、シャドウ丸とガンマツクスが姿を現し、

今回の事件で一夏を軽くからかうと、鈴は何故か笑えないと引きつった笑みを浮かべた。

そこで勇太が、王女を探索していた二人が戻つてきた意味に気が付く。

「あのう……

「つ！ 王女様！」

「えへへ……何だか、大変なことになつてたみたいで……。

「ごめんなさい」

「リエル！」

気まずそうに顔を見せるツイール国王女リエルは、乾いた笑みを浮かべて、

鈴へと頭を下げる。

国王は、一夏達ブレイブボリスに迷惑をかけたことへの怒りと無事なことへの安堵が混ざった何とも言えない表情を浮かべて、リエルに近づく。「ごめんなさい、お父様……」

「どうしても、これを持って帰りたかったの……」「一体、何を……」

素直に父である国王に謝るリエルは、カバンからあるものを取り出す。それは、日本の国旗が描かれた折り鶴であつた。

「これは……」

「子供の時に、お母様と一緒に日本に来て、ツイール国の国旗が描かれたのを買つてくれたのを覚えてる?」

「これなら、お母様にもまた日本を見せられるし……」

「リエル……」

『ねえ。確か、王女様のお母さんつて……』

『ええ、病氣で亡くなっています』

『なるほどね。母親との思い出の国を、見せたかったつてことか』

リエルの目的を知り、パワージョー達は納得したとばかりに、笑みを浮かべる。

「……はあ～。

リエル。確かに、お前の気持ちは分かつた……。

だが、その勝手な行いで多くの者達に迷惑もかけた。それは、わかるな？」

「はい……」

「ならば、しなければならないことがあるはずだ」

「……。

プレイブポリスのみなさん、本当にご迷惑をおかけしました。

「ごめんなさい！」

「ねえ？こうやつて、謝つてるんだからもういいでしよう？」

「一番迷惑かけられたお前がいいなら、俺も別にいいけど」

『そう言うと、思つたぜ』

「うん！」

リエルの二度目の謝罪に、鈴がこれで許すよう勇太や一夏達に願うと、一夏は元から気にしていなかつたのか、鈴本人がいいのならと許す。パワージョーと勇太も、一夏がそう言うだろうとわかつていたのか、つられて笑顔で頷く。

「ありがとうございます！でも、悔しいなあ～」

「何が、悔しいの？」

「私とそつくりな顔で、そんな素敵なお人がいるなんて！」

「ああ！私の王子さまはどこにいるの！」

「ちよつ！恋人？こいつが？」

「ないないない！絶対なあああいいいいつつつ!!!!」

「うん？恋人？」

……パワージョーって、鈴の恋人だったのか？」

リエルの唐突な恋バナに、鈴は顔を真っ赤にして全力で首を振りながら否定するが、一夏はとんでもなく的外れなことを言いだし、その場にいた全員をズツコケさせた。

「ん？どうしたんだ、みんな？」

「い、一夏……」

「この……おバカあああああああ!!!!」

「ス○ニ○ングダ○スつ！」

本気でみんながズツコケたことに首を傾げる一夏に、勇太は呆れ、

鈴はハートの仮○ライダーの必殺技のように回転キックを顔面に叩き込んだ。

『あれ？鈴なら、笑いながら否定すると思つたけど……』

『ええ。おそらく、間違いないかと……』

『本人は、まだ気づいていないかもだがな』

『一夏が大人になつたら、どうなるんだろうね？』

一夏にゲシゲシと蹴りを入れる鈴を見て、パワージョー達は鈴も落とされたかと  
気付くが、当の鈴は戸惑いを隠せていなかつた。

「（だあ～～～！）

何で、こんなにイラつくのよ！

そりやあ、私達はただのクラスメートだけど！

それでも、他にあるでしようが！

ていうか、これが箒と同じK.O.Iつて奴？

いやいやいやいや！

そんな要素、無いでしよう！

あんなイタズラ小僧な顔をしたかと思つたら、私をお姫様抱っこしたり？

みんなにはカツコイイ顔で指示を出してたけど！

てか、危ない所でかつこいい所を見せられて落ちるとか、

どんだけチヨロいのよ、私！）

どうやら、箒のライバルに本格的になるにはまだ少し時間がかかりそうである。

## 第7話 暴走特急！ 前編

「ご覧ください、皆さん。

ブレイブポリスと旋風寺コンツエルンが共同開発した、

超A-I搭載の新型特急『ロコモライナー』です！」

女性ニュースキャスターが、期待にあふれた声で紹介するのは、蒸気機関車を思わせるフォルムをした新型列車だ。

「超A-Iがロボット以外に搭載されるのは、世界初！

危険物の持ち込みや怪しい動きを見せる不審者も瞬時に感知し、  
乗客の安全が守られます。

また、最新のリニアモーターが採用されているので、スピードも

世界最速でありながら、騒音もほとんどないと言う、驚きの列車なのです！」  
キヤスターの説明に、周囲にいる報道陣から関心の声が上がり、カメラの  
シャッター音が鳴り響く。

「明日の開通式では、旋風寺コンツエルンの若き総帥、旋風寺舞人さんだけでなく、  
我らが女王陛下もゲストで招待されて……」

「盛り上がりがつていいね、デューク」

画面から流れるニュースを聞きながら、一夏はビーグルモードの救急車になつていて  
デュークに話しかける。

『当然だよ。

超A-Iを搭載したロコモライナーもだが、

開発に携わっているのは近年急成長中の旋風寺コンツエルン。

そこに、イギリスの女王陛下もとなれば、話題にならないわけがない』

「おまけに、総帥さんは勇兄と同じ17歳だもんね！」

しかも、すつごいかつこよかつたし』

『無駄話は、これぐらいにしておこう。

今の所、何か異常は？』

「うん、大丈夫。問題ないよ』

現在、一夏はデュークと共に、明日ロコモライナーが走るルートの  
安全確認を行つていた。

この開通式の警備のため、ブレイブ・ボーリスはイギリスへとやつてきていているのだ。  
日本の方を完全に留守にするわけにはいかないので、勇太と一夏。

そして、デッカードとデューク、ガンマックス、シャドウ丸が担当となつた。

「線路上に、爆発物や不審物は見当たらないね」

『こちら、シャドウ丸。』

駅の方も見て回りやしたが問題ありませんね』

『ガンマックスだ。』

『だが、油断はできない。明日女王が通るルートを確認したが、こつちも問題ない』

もしテロが起きるとしたら、当日に行動を起こす可能性は十分にある。

明日の朝の確認もしつかりと行おう』

警戒しすぎてしすぎることはない、デューケ達は気を引き締める。

『みんな、旋風寺総帥との打ち合わせは終わつた。』

『そつちに、何か異常はないか?』

『デッカード! ううん。何も問題ないよ。』

『勇兄は?』

『勇太なら、レジーナと話してゐるよ』

『久しぶりだもんね?』

『……』

デッカードからの通信に黙り込むデューケだつたが、それを感じ取つた

シャドウ丸とガンマックスは肩をすくめるのであつた。

『デュークの旦那、仮面の難しい顔してるのが丸わかりですぜ？』

『そこの鈍感おチビより、マシだろ？』

『別にそんな顔はしていない……』

「ん？ どうしたの、みんな？」

そんな彼らのやり取りを一夏は、不思議そうに傾げるのであつた。

「じゃあ、口コモライナーの方は頼んだよ、一夏」

「了解、ボス！」

翌日、勇太達は警備と口コモライナーの最終チェックを行つていた。

勇太とデツカード、デュークは駅と走行ルートの確認を。

シャドウ丸とガンマックスは、イギリス女王の護衛。

そして、一夏は口コモライナーのチェックを、開発を担当した旋風寺鉄道青戸工場長の

大阪次郎と共にに行うことになつた。

「さてと、工場長さんはまだ来てないな。  
しようがない。

変なものが取り付けられていないかどうかだけでも、見ておくか。

頼むぜ、ミニイ？」

一夏は、工具箱からミニイを数台取り出し、口コモライナーの周りや車体の下へと走らせる。

「次は……」

「ちよつと、あなた！」

先に、口コモライナーの中に入つてチエツクをと思った一夏だつたが、背後から突然、声をかけられる。

振り向くとそこにいたのは、余所行きのドレスに身を包んだ

自分と同い年に見える金髪の少女で、何故かこちらをにらんでいた。

「子供が、こんな所で何してますの！」

「何してるつて……お前だつて、子供だろ。

「てか、お前こそ、何してるんだよ。迷子か？」

「なつ！ま、迷子っ！」

このセシリア・オルコットに向かつて、何て……！」

一夏は、いきなり絡んできた少女に眉をひそめ迷子かと尋ねるが、  
気に食わなかつたのか、セシリアはワナワナと体を震わせる。

「許しません……許しませんわ！」

あなたみたいな礼儀知らずは、わたくしが成敗してくれますわ！」

「成敗つて、何を言つて……」

「関係者以外立ち入り禁止のこの場所にいるだけで、

怪しさ満載ですわ！」

「いや、俺関係者……」

「問答無用っ！！！」

「話を聞けえええ！！！」

思い込みが激しいのか、一夏の物言いに頭に血が上っているのか、

セシリ亞は一夏を捕まえようとする。

無論、一夏も黙つて捕まるわけもなく、ちょっとした鬼ごっこが始まつてしまふ。

「お待ちなさいーい！」

「そう言われて、待つ奴がいるかあつ！

うおつ？！」

ドレスを着ているにもかかわらず、セシリ亞の足は速く、

一夏は必死に逃げるも足を滑らせて転んでしまう。

「捕まえましたわっ！」

「ぐへっ！」

「さあ、観念してお縄につきなさい！」

「そのお縄につけるの俺の仕事！」

転んだ一夏に馬乗りし、身動きできないようにするセシリア。

必死に抵抗する一夏だつたが、体勢が悪く振りほどくことができない。

『セシリア・オルコット。彼を放してください』

「誰ですか!?」

『驚かせて申し訳ありません。

私は、口コモライナーです』

突然二人に話しかけてきた、ロボットの声。

それは、今日開通式を迎える口コモライナーのものであつた。

『セシリア・オルコット。

彼は、日本のブレイブポリスの少年警官、織斑一夏。

不審者ではありません』

「ブレイブポリス……嘘おつしやい！

こんな礼儀知らずの子供が、あのブレイブポリスのはずありませんわ！」

「嘘じやねえよ！俺は、ブレイブ・ポリスだ！」

「ほらっ！」

一夏のことを怪しい不審者と決めて疑わないセシリアは、口コモライナーの言葉を信じようとしない。

何とか警察手帳を取りだし、それを彼女に見せる。

「くくくっ！」

「で、でも！だつたら、何でウロウロしてましたの！」

『それは、私の体に不審物がないか確認していたからです。

今も、彼のメカが私の体をチェックしています』

「これで、分かつたか？」

「お前こそ、あんなところにいて、何か企んでいるんじゃないのか？」

「何ですってつづつ！」

『いえ。それは違います、織斑一夏。

彼女は、今日の開通式に招待されているオルコット家の令嬢です』

「令嬢!?」

「こんなお転婆が！？」

「誰がお転婆ですの！」

「おーい、セシリ亞～」

「一夏くーん」

不審者の誤解は、互いに解けたが一夏の発言で第二回戦が起きそうなった時、彼らをそれぞれ呼ぶ男の声が聞こえる。

「あつ。こんな所にいた……つて、どうしたんだ一夏君？」

「セシリ亞……つ！」

見つかって、よかつた～」

「工場長さん！」

「……お父様」

年配で如何にも職人といった感じの男性、大阪次郎は一夏の状況がどういうことが分からず、驚きの声を。

気弱で人が良さそうに見える男性は、安堵の声を上げた。

『旋風寺鉄道青戸工場長の大坂次郎と、

オルコット家のジェイク・オルコットですね。

どうやら、セシリア・オルコットが織斑一夏を不審者だと勘違いしているようなのです』

「ええつ！」

「どういうことだい、セシリ亞？」

「どういうこともこうしたもありませんわ！」

「こんな子供が、うろついているなんて怪しいですわ！」

「だくかくらー！」

口コモライナーのチエツクだつて、言つてるだろう……！」

「セシリ亞ちやんだつけ？」

一夏君の言つていることは、本當だよ。

チエツクの手伝いを頼んだんだ」

「うつ……」

大阪工場長の言葉に、自分の勘違いだとようやく理解したのか、

バツが悪くなりセシリ亞は言葉に詰まる。

「ハハハ……。

うちの娘が、ご迷惑をおかけしました。

さあ、セシリ亞も謝つて？」

「うううう……、あなたが誤解されるような紛らわしいことを

しているのが悪いんですわ！」

「はあ？ 何だよ、それ！」

「えっ、ちょっと！セシリ亞……っ！」

自分の間違いを認めたくないのか、セシリ亞は理不尽な責任転嫁をすると  
その場から走り去ってしまう。

「すいませんすいません。

セシリ亞が失礼なことを……。

セシリ亞～」

「あっ！ちょっと…………行っちゃった」

「災難だつたね、一夏君。

とにかく、チエツクをしようか

『お二方、よろしくお願ひします』

一夏は呆気に取られながらも、大阪工場長と共に、口コモライナーのチエツクを行うのであった。

「各センサー、正常に作動……っし！

大阪工場長、チエツク完了。

異常なしです」

「わかった。こつちも今やっているこの調整で、完了だ」

『大阪工場長。

何故、わざわざ手作業で作業を行つたのですか？

メンテナンスシステムでも、各機能、センサーに問題はありませんが』  
口コモライナーの操縦席で一夏と大阪工場長が最終チェックを行つていると、  
効率が悪いのではと、口コモライナーが問いかける。

「ハハハ。

確かに、そうだね口コモライナー。  
だけどね？

いくら技術が発達しても、こういう確認は人の手で行なうのが大切なんだ。  
ましてや君は、最初から変形を想定しているブレイブポリス達とは違う、  
世界初の超A-Iを搭載した列車だ。

『そういうものなのですか』

「勉強になります、大阪工場長」

そうやつて、談笑しながらも二人は最終チェックを完了させる。

「了解。お疲れ様、一夏。

向こうの最終チェックは、終わつたみたい」

『そうか。

こつちも線路上や駅に、不審物や不審者は見られなかつた。  
このまま、無事に終わつてほしいが……』

『女王陛下は、無事に駅に着いたようだ。

私達も配置につこう』

一夏からの報告を受け、デツカードとデュークはそれぞの配置位置へと  
移動する。

「はじめまして、キヤサリン・オルコット代表。

旋風寺コンツエルンの旋風寺舞人です」

「はじめまして、旋風寺総帥。

お会いできて光榮です。

「こつちは、夫のジエイクです」

「ジエイク・オルコットです。

いや～、お若いのに総帥なんてすごいですね。

僕なんかと大違ひだ」

「……つ。

そして、娘のセシリアです」

「セシリ亞・オルコットですわ。

以後お見知りおきを」

「こちらこそ、よろしく。小さなレディ」

「この度は、お招きいただきありがとうございます」

その頃、口コモライナーの出発駅では旋風寺コンツエルンの総帥と  
一目会おうと有名企業や財団の人々が押し寄せていた。

中には、一夏を追いかけまわしたセシリ亞と両親もいたが、

キヤサリン・オルコットは夫の腰の低い態度に眉をひそめていた。

「ミッショーン開始まで後30分……」

口コモライナーの開通式開始まで後20分——。